

巻頭言

平素より、三重県立看護大学地域交流センターの活動にご理解、ご協力を頂き、厚く御礼申し上げます。平成30年度の年報の発行にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

平成30年度も第2期中期目標期間の4年目として、さまざまな地域貢献活動に取り組んで参りました。特に、平成29年度から開講した認定看護師教育課程「認知症看護」においては、県内外から30名の第2期研修生が10か月の全教育課程を全員が修了し、新たに平成31年度の第3期生30名の入学者が決定しました。当初は3年間の開講予定でスタートした本事業は、県内外から開講継続の声も多く、受験者数からもそのニーズの高さを実感しております。このように医療・福祉の現場からの要望、応援の声、修了生の活躍の姿に励まされ、本学地域交流センターでは認定看護師教育課程「認知症看護」をもう1年継続（平成29年度から4年間）することが決定致しました。今後も、本学の教育課程修了者により三重県内の認定看護師「認知症看護」資格者数は全国の上位に達すると思われる、その活躍がますます期待されています。

今年度も本学教員の専門性を活かした事業では、「出前講座」78件参加者約2,900名、「その他の講師派遣」25件参加者約600名、「教員提案事業」17件、三重県からの受託事業3件を展開いたしました。「看護研究支援では、「看護研究基本ステップ」4日間で8科目13時間を開催し、県内医療施設19施設から43名の参加をいただきました。さらに「基本ステップ」からの連続的で順序性を意識した「ハウツー看護研究」（9施設24名参加）を看護研究支援の新規事業として本格的に取り組みました。その他にも、「施設単位看護研究支援」を8施設10件、「看護研究発表支援」2件など県内医療施設の要望に対応致しました。

「公開講座」は3回開催し、第2回は、みえ女性スポーツ指導者の会様・公益財団法人三重県体育協会様、第3回は、NHK厚生文化事業団中部支局様・NHK津放送局様との共催で開催し、各回310～400名という非常に沢山の方々にご参加をいただきました。

また、今年度は「平成30年度地域交流センター活動報告会」を広く地域に公開して、本学の社会貢献活動を知っていただく機会と致しました。

平成31年度も地域社会との連携・協働を深め、地域貢献活動の充実を図って参りたいと存じます。今後も一層のご理解とご支援をお願い申し上げます。

平成31年3月

地域交流センター長
宮崎つた子

目 次

I. 教員提案事業

1. みえ保健・看護力向上支援事業

- 1) 教育機関・県・市町保健師による体系的な研修プログラム作成 1
- 2) 県・市町保健師の実践能力向上研修 3
- 3) 初学者のための電子カルテ 5
- 4) 看護に役立つものづくりシーズ発掘 6
- 5) ケアする人のためのセルフケアのつどい 7
- 6) 卒後1年目を対象としたフィジカルアセスメント研修会 9
- 7) 看護職を対象とした運動指導実践講座 10

2. 他機関との連携による県民の健康増進事業

- 1) 地域の健康づくり支援事業 11
- 2) 在宅で障害のある子どもを養育する家族のピア・サポート事業 13
- 3) 健康づくりのための運動指導講座 17

3. 地域住民とのふれあい推進事業

- 1) みかん大認知症カフェ 19
- 2) 災害に備えて 21
- 3) アイルランドの伝統料理を作ろう 23
- 4) 英語で話そう 26
- 5) ケアの哲学カフェー立場をこえて話し合おうー 28
- 6) シネマで倫理学 30
- 7) 学生による地域に対するボランティア支援 32

II. 卒業生支援事業

- 1. 卒業生のきずなネットワーク 35
- 2. 卒業生支援構想プロジェクト 39

III. 受託事業

- 1. 新人助産師の臨床実践能力育成のための研修体制構築 41
- 2. 周産期における母子・家族支援のための臨床助産師の看護実践能力育成 45
- 3. 認知症対応力向上研修 49

IV. 認定看護師教育課程「認知症看護」 51

V. 地域交流センター企画事業

1. 講師派遣

- 1) 出前講座 53
- 2) その他の講師派遣 59

2. 看護研究支援

- 1) 看護研究の基本ステップ61
- 2) ハウツー看護研究64
- 3) その他の看護研究支援67

3. 公開講座69

VI. その他

- 1. 情報発信・広報活動73
- 2. 各種講座案内と申込書75

I．教員提案事業

1．みえ保健・看護力向上支援事業

1) 教育機関・県・市町保健師による体系的な研修プログラム 作成

担当者： 大越 扶貴、前山和子、中北裕子、井倉一政、森本裕也

【事業要旨】

県内保健師養成教育機関、県および保健師協議会等と協同しながら、現場の課題解決を見据えた保健師の体系的な研修プログラムを検討・作成する。

【地域貢献のポイント】

学部教育と卒後教育の連動により、大学と臨地の関係性の強化や循環型教育の実現を可能にし、保健師実践能力向上に寄与する。

I. 活動計画

最終年度である今年度は、3 大学の地域診断の教育・演習方法を市町保健師連絡協議会等の場で話題提供し、地域診断における実際の保健師活動上の課題や卒後教育の実際について意見交換を実施する。

1. 数値目標

- 1) 市町保健師連絡協議会等との会議開催（年 1～2 回）
- 2) 会議には 2 か所以上の教育機関の参加
- 3) 県の保健師研修担当部門との意見交換（1 回）

2. 重点課題

地域診断の教育・演習方法他について県・市町保健師に話題提供/意見交換し学部教育や卒後教育の在り方を検討する。

II. 活動の結果と評価

1. 市町村保健師連絡協議会（統括保健師¹⁾ 会議）において教育等の意見交換実施

四日市看護医療大学の公衆衛生看護学教員 2 名、本学教員 2 名参加し、資料および口頭にて各大学の地域診断の教育方法と新卒保健師研修（県主催 1 年目から 4 年目対象）について意見交換を実施した（2018 年 12 月 21 日）。

【評価】数値目標 1)、2) は達成した。重点課題については、統括保健師に対して地域診断の教育方法の情報提供を行うことで教育内容の共有化が図れた。卒後教育に関しては、新卒保健師研修を題材に意見交換を行い、新卒保健師の教育を担う中堅期の保健師の課題、臨床看護師を経て保健師となった場合の現場教育の在り方の課題などが挙げられた。

- 1) 「保健師の保健活動を組織横断的に総合調整および推進し、技術的及び専門的側面から指導する役割を担う（平成 25 年 4 月「地域における保健師の保健活動について」（厚生労働省健康局長通知)）」

2. 県の保健師研修担当部門との意見交換

関連事業である教員提案事業「県・市町村保健師の実践能力の向上研修」の打ち合わせ時に行った。

【評価】本事業と密接に関連する教員提案事業実施前・後の打ち合わせに参加し、県保健師研修担当部門および市町村保健師連絡協議会会長他と新卒保健師の現状と課題について意見交換を実施した。

Ⅲ．今後の課題

関連事業と両輪で保健師の力量形成に必要な基礎固めを行った。本事業を実施することで県内の保健師養成大学の教育と卒後教育の連動を図る一助となったと考える。本事業は最終年度のため継続予定はないが、引き続き市町村保健師連絡協議会や県保健師研修担当部門との連携を図っていく。

2) 県・市町保健師の実践能力向上研修

担当者： ○前山和子、大越扶貴、中北裕子、井倉一政、森本裕也

【事業要旨】

行政保健師が専門的な知識や技術・調整能力、そして行政運営等に関する能力を獲得し、地域で実践できる保健師を育成することを目的とする。なお、本事業は県及び市町保健師協議会と協働して実施するものである。

【地域貢献のポイント】

- 保健師個々の実践能力が向上することにより、住民に質の高い保健活動が展開できる。
- 県主催研修会、及び市町保健師協議会主催研修会との研修内容の棲み分けが可能となり、互いに連動させることにより研修を効率よく実施することができる。

I. 活動計画

- 県・市町・大学との連携会議を開催する。
- 実践能力向上研修会を年3回開催する。

II. 活動の結果と評価

1. 保健師人材育成に係る県・市町・大学との連携会議の開催

- 1) 日時：平成30年5月11日（金）
- 2) 参加者：県庁健康づくり課統括保健師・市町保健師協議会長・本学教員
- 3) 結果及び評価：各機関における保健師研修に昨年度実績と今年度計画について情報共有した。その中で、中堅期保健師の育成の重要性等について意見が出され、本学において、ファシリテーターを養成する研修会を開催することとした。

年度初めに話し合いをもったことから、各機関が実施する研修内容の重複を避けることができ、さらに、県・市町の研修内容を補完するものとなった。

2. 保健師実践能力向上研修会の開催

各職場の指導的立場を担う中堅期以降の保健師を対象に、ファシリテーションを行うスキルを身につけることを目的に研修会を3回開催した。

1) 第1回研修会

- (1) 日時：7月31日（火）午後1時～4時
- (2) 内容：「質的情報を収集する際のファシリテーションについて」

2) 第2回研修会

- (1) 日時：8月31日（金）午後1時～4時
- (2) 内容：「事例検討会におけるファシリテーション手法について」

3) 第3回研修会

- (1) 日時：10月16日（火） 午後1時～4時
- (2) 内容：「ファシリテーションの実践」

4) 評価

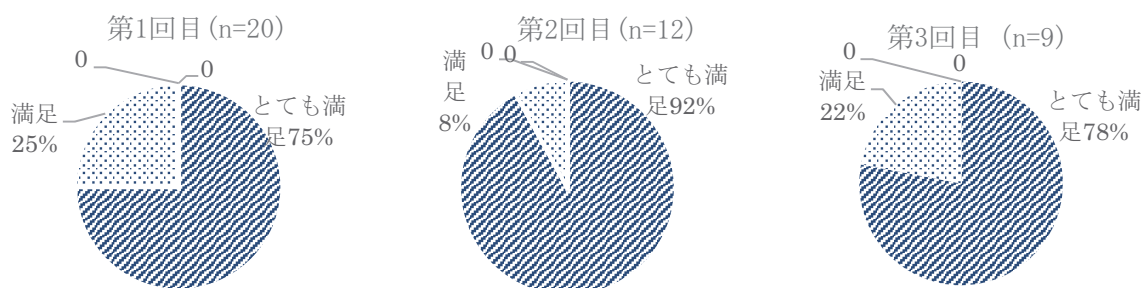
研修会には延べ41人が参加した。内容は講義だけでなく、グループワークと体験を中心としたもので、積極的に参加する姿勢が見られた。実施にあたり、県及び市

町保健師協議会、また津市保健師に講師及びアドバイザーとして参加してもらった。

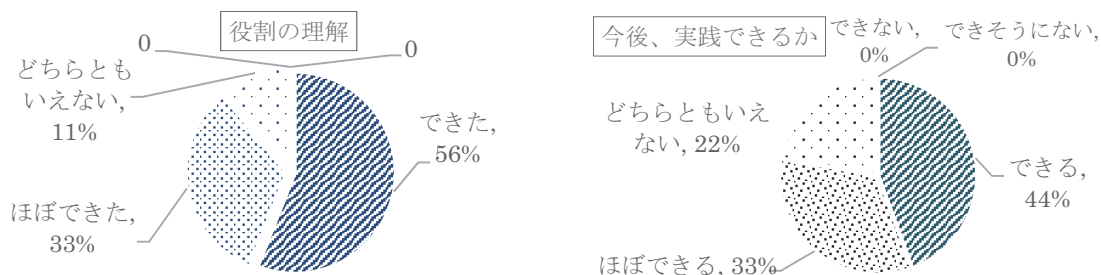
研修会全体の満足度は、何れの回も「とても満足」「満足」を合わせて 100%であった。また、ファシリテーターの役割について「理解できた」「ほぼできた」を合せると 89%で、「どちらともいえない」と回答した理由は、「ある程度、見立てや流れがわかっていないと難しい」等であった。今回の手法を用いてファシリテーターとして実践できるかについては、「できる」「ほぼできる」を合せると 77%で、「どちらともいえない」と回答した理由は、「手法は理解できたが、自分の技能が未熟で自信が持てない」等であった。現場のどのような場面でファシリテーション技法を活かすことができるかとの問いには、ケース会議、担当者会議、地域住民との会議等が出され、今後、各職場で実践されることを期待したい。

研修会参加後のアンケート結果は以下のとおりである。

○研修会の満足度について



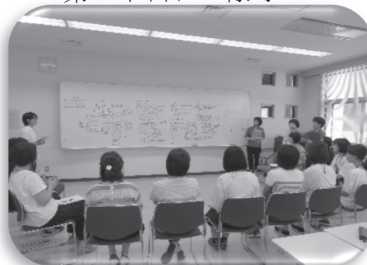
○ファシリテーターの役割の理解、及び今後の実践について



< 第 1 回目の様子 >



< 第 2 回目の様子 >



< 第 3 回目の様子 >



IV. 今後の課題

新任保健師の増加に伴い、その指導的立場を担う中堅保健師、さらに統括保健師の育成が急務であることから、県及び市町等と連携する中で、保健師人材育成における県立看護大学としての役割と位置づけを明確にしていくことが課題と考える。

3) 初学者のため電子カルテ

担当者：斎藤 真、長谷川 智之

【事業要旨】

本事業は、電子カルテの操作方法を中心に看護記録の活用に至るまで初歩から学習し、看護職者の ICT への不安を軽減することを目的としている。対象者は、結婚や産休、育休などで長期に看護職を離れていた方や初めて電子カルテに触れる方、上手に使いこなせない方およびパソコンの操作自体が苦手な方とした。電子カルテはメーカーにより操作手順が異なるが、電子カルテに共通する操作、考え方などの基本を学ぶ講座として開催した。

【地域貢献のポイント】

現在、三重県内の 400 床以上の医療機関で電子カルテを導入しているのは 100%であるが、電子カルテの操作は各自のパソコンスキルに依存するところが大きく、苦手意識を持った看護職者も多い。また潜在看護師の再教育は、看護技術を中心に多くの医療機関等で行われているが、電子カルテの教育は皆無である。電子カルテの操作に不安を持つ看護職者に対し、教育機材を保有する高等教育機関等が教育を担う必要があるものとする。

I. 活動計画

本年度の重点課題は、本学が電子カルテの教育を行っていることを認識してもらうこと、また潜在看護師の再教育の一助とすること、さらに電子カルテの実用的な教育方法を開発につなげることとした。

II. 活動の結果と評価

今年度は 4 名の参加者であった。本講座終了時に参加者から無記名でアンケートをとり、参加者の背景、理解の度合いについて確認した。参加者の年齢は 40～60 歳までが 75.0%、職種は管理職が 50.0%であった。また、本講座に参加した理由は、就職活動のため、電子カルテを深く学びたい、導入前に学びたい等であった。

理解の度合いは、6 つの研修項目のうち、①基本操作編、②外来編、③入院編、④看護計画編、⑤看護業務編については参加者全員が理解できたと回答を得た。これについては昨年度と同様であり、電子カルテの操作については我々が作製した教材、演習内容で必要条件是満たすことが示された。一方、操作方法よりもさらに深い内容や専門的な内容を学びたいとの意見もあり、具体的には電子カルテから得られた情報を看護過程の展開に繋げることの重要性を示唆していると思われる。

III. 今後の課題

本事業は今年度で終了するが、今後の課題として中上級者向けの教育内容の構築が必要と考えている。

4) 看護に役立つもののづくりシーズ発掘

担当者：斎藤 真、大西 範和、大平 肇子、長谷川 智之、市川 陽子

【事業要旨】

本事業は、今後需要が拡大することが予測される看護ケア用品の開発に向けて本学教員のアイデアを発掘、試作品の製作や有用性の検証、さらに本学の知的財産として保有可能か検討するものである。本学は以前より独立行政法人工業所有権情報・研修館の産学連携知的財産アドバイザー派遣事業に参加してきた。平成 30 年度からは新たな派遣事業制度に採択され、知的財産の積極的な創出に向けて学内の組織体制を再構築した。特に今年度は構築した組織体制により、本学教員、連携協力病院からの派遣教員および本学卒業生らによる「看工連携ブレインストーミング」を開催し、知的財産となり得るシーズの発掘を行った。

【地域貢献のポイント】

本事業の推進は、三重県内の看護職者の持つケア製品へのシーズ発掘や地元企業との産学連携などを目的としている。特に県内病院に勤務する看護職員からのケア製品のシーズを発掘することで県内病院への貢献が期待される。また、それらの新技術を地元企業と連携して製品開発をすることで地域貢献活動に還元できる。

I. 活動計画

1. 看工連携ブレインストーミングを月 1 回開催し、シーズの発掘を行う。

II. 活動の結果と評価

活動は「看工連携ブレインストーミング」を月 1 回開催し、2 件のシーズを発掘した。そのうち 1 件は特許出願に向けて知財委員会に提出した。

＜ブレインストーミングの話題は以下の通り＞

- 第 1 回：患者の清潔、自己抜去、排泄、ベッド移乗、教育教材等（5/16）。
- 第 2 回：患者の観察、薬液の保温、血液透析漏れ、低反発マットレス等（6/26）。
- 第 3 回：採血時の針刺し事故等（7/24）。
- 第 4 回：試作品についての議論（10/17）。
- 第 5 回：異業種交流展示会メッセナゴヤ 2018 報告会、幼児用ケア物品等（11/14）
- 第 6 回：新シーズの検討、幼児ケア物品等（12/12）
- 第 7 回：手の拘縮予防、介護用衣服、指歯ブラシ、木製ストロー等（1/21）。
- 第 8、9 回を 2、3 月中に開催する予定である。

III. 今後の課題

知的財産となり得る案件は具体化させる。また、現在学内で行っている看工連携ブレインストーミングを連携協力協定病院でも開催可能であるか検討を進める。

5) ケアする人のためのセルフケアのつどい

担当者： 鈴木聡美

【事業要旨】

医療や介護、その他の現場で日々ケアを提供している人を対象とし、ケアにまつわる思いを職種や立場の壁をこえて語り合ったり、ハーブを使ったリップクリーム等を作成するワークショップの開催を通して、ケア提供者が自分自身をケアできるような場をつくる。

【地域貢献のポイント】

病院や施設等のケアの現場では、ケアの方法や評価について話し合う機会は多くあるが、ケア提供者自身の主観的な思いを表現するような場はあまりない。本事業では、ケア提供者が職種や立場をこえてケアにまつわる思いを語り合うことで自分自身をケアし、そのことによりケア提供への活力を得ることに貢献できると考える。

I. 活動計画

1. 数値目標

本年度は開催回数 1 回、参加者人数 10 名以上を目標とした。

II. 活動の結果と評価

1. 事業の対象者について

当初の予定では、医療施設や介護施設単位での実施を検討していたが、ケア提供者のニーズを医療・介護に限らず幅広い方々から聴取し、今後の活動の方向性を考えたいとの理由から、本年度は志摩市で開催された福祉フェスタで様々なケア提供者を対象としたワークショップとして開催することとした。

2. 実施日時・場所

日時：平成 31 年 1 月 27 日（日）

10：00～16：00

場所：志摩市阿児アリーナ

「志摩市認知症・障がい福祉啓発事業」にて実施

3. 内容と評価

ケアについて数名で語り合いながら、アロマリップクリームを作成するワークショップを実施した。開始のための固定した時間は決めず、適宜希望のあった 3～5 名ずつでリップクリームを作りながら話をした。参加者は合計で約 38 名であり、看護師やケアスワーカー、介護職員、保健師、障がい者等へのボランティア、NPO の職員等、何らかの形で日常的にケアを実践している人たちであった。参加者からは「香りが良くて癒される」「こうやって夢中になって物を作るのって楽しい」等、ワークショップの

効果を体感していた様子であった。また、看護師の参加者からは、病院等で勤務する看護師に対してこのような機会があるとうれしいとの意見も聞かれた。



写真：ワークショップの様子

IV. 今後の課題

本年度はワークショップ運営を1名で行ったため、十分に語り合いのファシリテートができずに、それぞれの回が慌ただしく終わってしまった印象がある。スタッフを増やしたり、事前受付制にするなど、十分に語り合い、セルフケアができるような、時間的ゆとりをもったワークショップが開催できるように工夫が必要である。また、病院の看護師にこのような事業のニーズがあると考えられるため、県内の病院に対して事業の提案を検討したい。

6) 卒後1年目を対象としたフィジカルアセスメント研修会

担当者：◎菅原啓太、岡根利津、鈴木聡美、白石葉子

【事業要旨】

卒後1年目の看護師のフィジカルアセスメント技術力を高めるため、研修会を実施する。また、受講者が研修後も自己学習できるように、フィジカルアセスメントの学習に活用できるシミュレーション人形の基本的な使用方法を学ぶ機会を作る。

【地域貢献のポイント】

受講生のフィジカルアセスメント技術力を高めることが期待できる。この技術習得は、看護実践に根拠を与えることに繋がり、自信を持って質の高い看護を実践できる看護師の育成に貢献できると考える。また、シミュレーション人形を活用した学習方法を、受講生自身に体験してもらうことで、受講後も、本学のシミュレーション人形を活用した主体的な学習へと結びつけることができると考える。

I. 活動計画

年1回、研修会を開催し、受講生6名以上を目指すことを目標とした。

II. 活動の結果と評価

1. 日時・場所：2月16日13:00～16:00・三重県立看護大学 実習室2

2. 参加者

当初、対象者は卒後1年目としていたが、2～3年目の看護師も、院内研修でフィジカルアセスメントの技術を学ぶ機会が少なく需要が高いと考え、対象を1～3年目に拡大した。看護師17名（1年目10名、2年目1名、3年目5名、5年目1名、うち本学卒業生1名）が参加し、目標を達成することが出来た。

3. 内容と評価

講義で、呼吸器系のフィジカルアセスメントに必要な解剖生理学、体表解剖学の復習を行った。演習では、参加者の体や、Physiko・ラングⅡのシミュレーション人形を用いてタスクトレーニングを実施した後に、SCENARIOを用いたシミュレーショントレーニングを行った。事後のアンケートでは、17名全員が研修会に参加して「とてもよかった」もしくは「よかった」と回答していた。また、「脳神経・循環器系の研修を行ってほしい」「学習モデルを用いた学習は理解しやすかった」等の意見もあった。

III. 今後の課題

今後は、参加者の意見や反応をふまえて、よりニーズに合わせた目標や内容を設定すると共に、看護職者にシミュレーション人形を活用して自主的に学習してもらえる方法を考案していく必要がある。

7) 看護職を対象とした運動指導実践講座

担当者：◎白石葉子、大西範和、鈴木聡美、菅原啓太、岡根利津
武笠元紀、棚尾仁美、濱口幸美

【事業要旨】

健康寿命の延伸を目指して健康増進・疾病予防の重要性が増し、看護職にも運動指導の知識や技術が求められている。本事業は4年目の実施であり、今年度は認知症と運動の関係を学び、基礎的な運動処方of知識と技術を身につけることを目的として行った。

【地域貢献のポイント】

看護職者には、実践的な運動指導について学ぶ機会は殆どない。看護職向きの運動指導の講座を実施することにより、運動を入院患者や地域住民の看護に取り入れることが出来る人材が増えることが期待される。

I. 活動計画

これまでに、看護職者自身に運動の楽しさや爽快感を感じてもらう必要があることが課題として示されていた。そこで、参加者にはコグニサイズTM*の運動を体験してもらい、その上で事例に合わせた運動プログラムの作成を行ってもらった。目標募集人数は、10名/回以上であった。*国立長寿医療研究センターが開発した、運動と認知課題を組み合わせた、認知症予防を目的とした取り組みの総称。

II. 活動の結果と評価

1. 第1回目 「認知症と運動の関係・エンジョイ!コグニサイズTM」

1) 参加者：看護職者（保健師・看護師）24名、本学学生2名

2) 内容と評価：軽く汗をかき、息が弾む程度の運動強度のコグニサイズTMを行った。

参加者は汗をかきながら笑顔で楽しそうに実施していた。

2. 第2回目「基礎的な運動処方・認知症予防に役立つ運動を中心とした指導」

1) 参加者：看護職者（保健師・看護師）23名、本学学生3名

2) 内容と評価：認知症予防に効果がある運動のプログラムを考えてもらった。

参加者はグループで課題に熱心に取り組んでいた。

第1回目、2回目の事後アンケートでは、全ての項目で満足度が1番高い評価をつけた人が50%以上いた。もっと行いたい・時間が不足したという意見が複数あった。

III. 今後の課題

参加者は目標の2倍以上に達し、もっと行いたかったという声もあることから、今後も看護職者のニーズを明確化しながら継続する必要があると考えられる。

2. 他機関との連携による県民の健康増進事業

1) 地域の健康づくり支援事業

担当者：上杉佑也・宮崎つた子・田端真・清水律子・白石葉子・竹村和誠・大西範和

【事業要旨】

本事業は、地域の住民の健康づくりに関する依頼があった市町を対象として、地域と協働して、地域生活のなかでの健康づくり、健康管理に関する活動をサポートする事業である。地域におけるコミュニティづくりの活動の場、イベント、住民の交流の場で定期的な健康づくり活動を行うことにより、地域住民の健康意識が向上することを目指す。

【地域貢献のポイント】

本学教員の専門性と地域交流センター所有の機材を活用しながら、地域住民のニーズに対応するとともに健康意識の向上に寄与する。同時に、本学の地域貢献活動への広報的な効果が期待できる。

I. 活動計画（3年計画の初年度）

- ・ 地域・市町（行政）・団体からの協力依頼数：1回以上
- ・ 事業企画・運営・評価方法検討のための学内会議：3回以上
- ・ 連携団体との合同会議：2回以上
- ・ 健康チェック継続利用者数：延べ20人以上
- ・ 参加者へのアンケート調査による次年度の活動内容の検討

II. 活動の結果と評価

1. 本年度の活動内容

1) A町での健康チェックの参加

A町役場福祉課からの依頼を受け、地域のイベントに参加し、住民の健康チェック（血圧・体組成・貧血・骨密度・ストレスチェック）を実施した。その際に、本事業の満足度や健康意識向上への寄与の程度、地域住民の健康へのニーズについてアンケート調査を実施した

2) アンケート結果

- ・ 参加者74名中42名より回答が得られ、性別は「男性」9.5%、「女性」78.5%、「無記載」12.0%であった。年代は「60歳代」が38.1%と最も多く、次いで「60歳未満」30.9%、「70歳代」26.2%であった。
- ・ 本事業に対する満足度は「満足」78.5%、「やや満足」14.3%、今後の健康づくりに役立ちそうかは「役立つ」80.9%、「やや役立つ」14.3%、今後の参加希望は「そう思う」92.8%であった。
- ・ 健康維持の為に企画して欲しいテーマや内容として「簡単な運動（歩かなくてよ

いもの)や効率的な運動の方法、運動のコツ、運動の大切さについて」等の運動に関するものが多く、「地区ごとに体操やストレッチを月に数回来てほしい」という意見もあった。また、「食育の講演、骨密度・糖尿病・血圧に気を付けた食事、食事のポイント」等の食事に関するものが挙げられた。

- ・ その他、要望・感想として「丁寧な説明で良かった」「普段このような健康チェックは受けないので自分の体の様子がわかりよかった」「健康の為、いろいろな事をしたいと思います」といった肯定的な意見が多く寄せられた。一方で、「時間が足りず、受けられない項目があった」という意見も見られた。

2. 活動計画に対する評価

- ・ 地域・市町(行政)・団体からの相談としては、市町からの連携希望が1件であった。連携の内容としては健康チェックを実施し、この事業には74名の地域住民の参加が得られた。参加者に実施したアンケートでは、本事業が健康づくりに役立つと回答していた人が80.9%であったことより、満足度は高かったと考えられる。また、自由記述では、健康づくりのために色々と活動したいという意見が多数あったことより、本事業は、住民の健康づくりへの意識向上に寄与したと考えられる。
- ・ 事業企画・運営・評価のための学内会議は2回行い、次年度への検討を含めた会議を今後行う予定である。今年度申し入れがあった連携団体は遠方であったことより、対面して会議を行うことは難しかったが、メールや電話を通じた調整により問題なく事業を展開することが出来た。現地では、担当保健師から、地区の公民館等で住民同士の交流や体操等を行うサロンを定期的に行っていることや、事業を行う際に多くの住民が1か所に集めるのは難しいという地域特性、また専門家の知見を活かした健康教室に対するニーズについて情報収集することができた。

Ⅲ. 今後の課題

A町は、本学からは遠方にあり、教員が頻回に出向いて健康づくりへの支援を行う事は難しいが、運動に関連した健康づくりへのニーズもあることから、実施方法を工夫して支援を継続する必要がある。具体的には、健康チェックについては、機材や物品の搬入や測定に際し、市町やボランティアの協力を得て、参加者が、より円滑にチェックを受けることができるようにするなどである。また、健康チェックだけに留まらず、A町の関係者と情報共有し、住民のニーズを焦点化した優先順位の高いテーマやA町で行われている住民活動に関連した健康教室を今回のような機会に組み入れて開催するなど、本学教員の専門性を活かせるよう検討していく必要がある。さらに、実施可能な範囲で支援対象とする連携団体を増やすことも視野に入れ、本事業の情報発信の方法も検討する必要がある。



健康チェックの様子

2) 在宅で障がいのある子どもを養育する

家族のピア・サポート事業

担当者：上杉佑也・宮崎つた子・井倉一政・中北裕子

【事業要旨】

医療的ケアが必要な子どもを在宅で養育している家族は、様々な困難を抱え心身ともに疲弊している現状にある。同様の体験を持つ家族との交流が、不安や孤立感解消の一助となるが、複数の家族同士が交流を行える場は少ない。本事業は、ピア・サポートの観点から、関係施設、関係専門職同士が連携して家族同士の交流の機会を支援する事業である。

【地域貢献のポイント】

地域の医療機関・専門職との連携及び本学の専門性（研究成果の還元を含む）を活用しながら、家族同士の交流を求めるという養育者にニーズへ対応し、養育者の抱える困難感の軽減に寄与する。

I. 活動計画

- ・ 地域の小児在宅や障がい児を抱える家族のニーズの情報収集：1地域以上
- ・ 関係施設からの希望に応じて企画内容の確認・実施：1地域以上
- ・ 実施可能事業に関して、企画・運営等の打ち合わせ（学内3回程度）
- ・ 医療・福祉・教育関係機関専門職との連携会議（依頼先と合同3回程度）
- ・ 交流の機会の開催に関する準備、当日等のサポート：開催1回以上
- ・ 参加者へのアンケート実施・集計：1回以上
- ・ 依頼先との反省会：1回
- ・ ピア・サポート事業の参加者：5人以上

II. 活動の結果と評価

1. A家族会への参加

B病院に通院中の在宅で医療的ケアを行っている子どもの母親を中心とした家族会（以下：A家族会）を支援する位置づけで、家族会の代表及び協力団体であるB病院の医療スタッフと事前準備や広報、評価方法の検討を事前会議として行った。検討された内容をもとに評価のためのアンケート作成を行い、学内で更に内容を検討した。当日の運営では、会場設営や受付業務、参加者の子どもの応対、書記、アンケート配布などを行った。また、連携会議も含め本学の学生2名がボランティアとして参加し、在宅医療分野の学びに繋がった。アンケートの集計結果を基に家族会代表及びB病院の医療スタッフと事後会議を行い、次回に向けて改善案などの検討を行った。

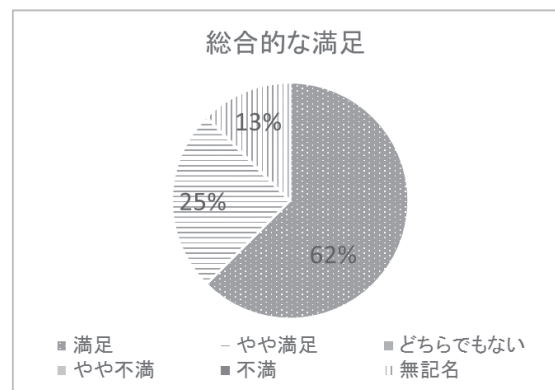
1) 家族会の内容

A 家族会は協力団体の医師、看護師、メディカルソーシャルワーカーがサポーターとして参加している。病院自己紹介の後、「初めての〇〇」をトークテーマとし、順番に参加者に体験談を語ってもらった。適宜、参加者同士の質問にサポーターがコメントを返しながらいき、後半は参加者が抱えている疑問を自由に話し合った。『初めてのレスパイト』では「最初は抵抗もあったが利用してみると楽になり、思い切ってつかって見ることも大事だと思う」、『初めての旅行』では「荷物が多いなど事前の準備が大変で対応を考えておくことも必要」、『初めての療育』では「思いがけない子どもの反応が見れたことで自分の中でも変わるきっかけとなった」等の体験談が話された。災害に関連した備えの疑問や不安についての意見も多く、旅行やレスパイト利用がその備えになることなど医師からの助言があった。

2) アンケート結果

アンケートは 8 名より回収でき、年齢は平均 35.88 ± 5.303 歳であった。平成 29 年度の立ち上げから現在までに 2 回開催している A 家族会への参加回数は、「2 回目」が 75.0%、「3 回目」が 25.0%であった。開催日時、場所、総合的な満足については、8 割以上が「満足」あるいは「やや満足」との回答であった。実施時間については全員が「ちょうどよい」との回答であった。

自由記述として、参加にあたって大変だったことについて「弟が心配でぎりぎりまでどうするか迷った」、参加して良かったことについて「色々な話や悩み事も聞けて皆、同じような思いをしているんだなと思って安心した、気持ちを吐き出す場所があまりないので気持ちが楽になった」「災害時の対応を色々教えていただけたのが良かった」、意見や要望として「今後、きょうだいも一緒に参加できて、きょうだいの輪も出来たら良い」といった肯定的な意見が得られた。



3) 活動計画に対する評価

地域の障がい児を抱える家族のニーズ及び関係施設からの希望に応じて、家族会の開催に協力することができた。近隣の施設であることから連携もとやすく、打ち合わせとして 4 回の学外会議に加え複数回電話やメールでの確認、3 回の学内会議を行うことができスムーズに家族会を開催することができた。また、事後会議を 1 回行い、次回に向けての課題点を検討するとともに、他地域で家族会を開催するための知見を得ることができた。当日は、保護者、重症児、きょうだいを含めて 12 名の一般参加が得られた。医師をはじめとした医療職者がサポーターとして参加することで、養育者の疑問にタイムリーに答えることができるのが A 家族会の強みといえ、アンケート結果からも参加者の満足度も高いことが伺えた。

2. C 家族会の開催

NP0 法人 D (以下、D 団体) 利用者の保護者から家族会開催の要望があり、D 団体職員、医療的ケア児支援のための医療・福祉・行政の他職種団体 E (以下、E 団体) スタッフと合同の形で、C 地域で初めて開催することとなった。E 団体スタッフと広報、家族会の内容、評価方法等について事前会議を行い、それを基に学内で広報の内容、アンケート内容や当日の運営方法について検討を行った。家族会当日は、会場設営や受付業務、司会、参加者のきょうだいの対応、書記、アンケート配布等について関係団体と協力しながら運営全般にわたり本学が中心的な役割を担った。

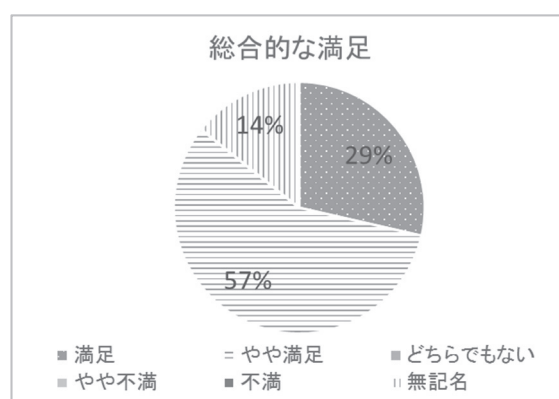
1) 家族会の内容

本学の教員に加え、関係団体の D 団体職員、E 団体スタッフ、F 大学ボランティアサークルがサポーターとして参加した。昼食を会場でとりながら自由に交流してもらった後に、きょうだいと保護者及び重症児で別れて家族会を行った。きょうだいについては、ボランティアサークルメンバーが中心となり、スタッフの監督のもと遊戯室で自由に遊んでもらった。家族会は簡単な趣旨説明と開催の経緯について説明し、全体で自己紹介を行った後は特別な企画は設けず、保護者同士が興味のある話について意見交換を行ってもらった。「仕事との両立をどうしているか」「受け入れに時間はかかったか」「きょうだいの行事の参加や友達への説明はどうしているか」といった質問がだされ、参加者各々が自由な雰囲気の中で和気藹々と話すことができた。

2) アンケート結果

アンケートは 7 名より回収できた。日時については「満足」71.4%、「やや満足」28.6%であった。開催場所については、「満足」57.1%、「やや満足」42.8%であった。実施時間については、「ちょうどよい」85.7%、「やや長い」14.3%であった。総合的な満足については、「満足」28.6%、「やや満足」57.1%であった。

自由記述として、参加にあたって大変だったことについて「きょうだいの子守り」「交流会の時間を知らされていなかった」、参加して良かったことについて「同じ地域に住む、同じような境遇の方たちと顔見知りになれたことが良かった」「ケア児の育児は大変、しんどいと思うのはみんな感じることで罪悪感を感じなくて良いのかなと思った」「パパの考えを聞けてよかった」、意見や要望として「次回楽しみにしてます、できれば春や秋頃がいい」といった意見が得られた。



3) 活動計画に対する評価

地域の障がい児を抱える家族のニーズ及び関係団体からの希望に応じて、C 地域で初めての家族会を開催することができたのは大きな成果であった。重症児とそのきょうだい、父親も含めて参加が得られるように参加者の条件は特に設けずに、保護者が

交流に専念できるようきょうだいの面倒についてボランティアサークルの協力を得るなど工夫することができた。当日は、父親から多くの話題提供があり家族会全体の活発な意見交換に繋がったと考えられる。また、普段自分の思いについて話をする場が少ないと思われる父親が、気持ちを発散できる場となったことが伺え、参加者の条件を設けなかったことの意義は大きかったと考える。

打ち合わせとして1回の学外会議に加え、E団体スタッフと複数回電話やメールでの確認、2回の学内会議を行ったが、準備期間が短かったことや初めての開催に加え開催場所及び関係団体が遠方であることから、広報の方法やスタッフの役割に混乱が生じ準備不足といえる課題は多く残った。

当日は、保護者、重症児、きょうだいを含めて15名の参加が得られ、アンケート結果からも参加者の満足度も高いことが伺えた。

Ⅲ. 今後の課題

A 家族会は、アンケート結果からも好評であり、本年度の同様の形態での開催が好ましいと考えられた。広報の方法が課題となっており、家族会の代表と連携しながら検討していく必要がある。また、協力団体のサポートは得られるものの、家族会の代表1名が計画している状況にあり、代表者の意図も組みながら、サポートできる人物を模索していく必要がある。

C 家族会は、保護者のニーズに応え本学が中心的に協力できたことは大きな成果であった。今後の開催に向けては、家族会の呼称、関係団体との連携方法・役割分担の明確化、中心的に協力の得られる保護者の模索、協力の得られる他職種活用、家族会の継続的な開催方法・家族会の内容の検討、広報の方法等多くの課題・検討事項を有しており、次年度に向けて改善していく。



重症児のきょうだいと学生ボランティア



家族会の様子

3) 健康づくりのための運動指導講座

担当者：大西範和、白石葉子、鈴木聡美、菅原啓太

【事業要旨】

看護や運動生理学等の専門的見地から運動やその指導方法、健康・体力の評価に関する講習会を開催し、健康チェック等を要望に応じて実施する。また、バドミントン教室を開催し、地域のサークル活動等で指導的立場にある方を含め、楽しみながら技術を向上させる工夫や長く続けるための方策を提案する。

【地域貢献のポイント】

健康づくり運動や運動・スポーツ指導の方法や実施上の注意点等について、愛好者や指導者を対象に専門的見地から支援を行い、県民の健康づくりや生活の充実に寄与する。また、スポーツ指導を行うことにより、参加者には楽しんで頂きながら、指導の現場で活かせるような情報を提供し、健康づくり運動やスポーツに関する、正しい知識や技術の普及を図る。

I. 活動計画

以下のような事業により、健康づくり運動やスポーツ指導の実施や指導に関わる知識や技術やデータの提供を行う。下記 1. または 2. のいずれか 1 回を実施するとともに、3. を 1 クール開催し 20 名の参加者を得ることを目標とした。

1. 要請に応じて、看護や運動生理学等の専門的見地から、健康づくり運動や運動・スポーツ技術の指導方法、健康・体力の評価方法に関する講演や講習会を開催する。
2. 要請に応じて、健康チェック等を実施する。
3. 初心者から地域のサークル活動等で指導的立場にある方までを対象に、バドミントン教室を開催する。

II. 活動の結果と評価

1. 鈴鹿市で活動するスロージョギングのクラブより要請を受け、29 名の会員（65 歳以上）を対象に、平成 30 年 8 月 10 日（金）10：00 から 90 分間、三重県鈴鹿市、白子コミュニティーセンターにおいて、運動時の体温調節や水分補給に関する講演を行った。平成 30 年度は、最高気温が従来の記録を更新し、熱中症による救急搬送者が、7 月だけで平年の 1 年分に達するという猛暑の夏であり、タイムリーな講演となった。アンケートでは、97%の参加者が「大変よかった」、「よかった」と回答し、93%の参加者が「とてもわかりやすかった」、「わかりやすかった」と回答した。自由記述には「科学的データによる説明で分かりやすかった。」、「今年の異常気象の中大変いいお話を聞かせてもらいました。ありがとうございました。」、「とても楽しく勉強できました。全然退屈しなかったです。もっと講義をうけたいと思いました。」、「熱中症は今までひ

とごとのように考えていましたが、今年は身近に考えるようになったので、今日はお話を伺えてよかったです。たまの汗をかいても体温が下がっていないということに驚きました。保冷剤で手を冷やすというのはいい方法だと思いました。」「笑いユーモアが入って聞き入ってしまいました。眠気がとんでしまいました。久しぶりによい勉強が出来ました。」などの意見や感想が書かれており、有用な情報提供の場となった。

2. 健康チェックの要請はなかった。

3. バドミントン教室については、平成 30 年 11 月 13 日（火）、12 月 7 日（金）、19 日（水）に近隣の高等学校バドミントン部の比較的初級者を対象として、1 回 60 分程度 3 回の技術指導講座を行った。参加者は毎回約 20 名で、基本的なラケットストロークやフットワークといった技術のポイントや、リーダーに対しては練習方法の選び方ややり方などをアドバイスした。接する時間は短かったが、参加者は熱心に取り組んでいた。内容や自分たちのやるべきことなどについて質問もあり、有用な講座となったと推察する。参加者アンケートには 9 名が回答し、「役に立った」、「やって良かった」の項目で、約 6 割が「そう思う」、「少しそう思う」としていた。この講座で提供できた情報は多くはなく、直接の効果は僅少であったと推察されるが、参加者にはパフォーマンスを向上させる材料の一つとして将来につなげてほしい。

Ⅲ. 今後の課題

当事業は概ね順調に遂行することができ、特段の問題は浮上していない。今後も適宜見直しながら今後も事業を継続する予定である。3. のバドミントン教室については、今年度は、高等学校の部活動の中の一部初級者を対象とした。時間的な制限により、ワンポイントアドバイスの形をとらざるを得なかったことは残念である。今後腰を据えた講座ができる機会があれば、体系的で順序性のある講座にしたい。一方、ワンポイントアドバイスとして行う場合を想定し、対象の状況を早期に把握する情報収集能力を高め、それに応じて内容を精選して提供できるよう幅を広げることが大切であると再認識でき、伝える方法についての工夫とともに今後の課題としたい。



図. バドミントン講座の様子

3. 地域住民とのふれあい推進事業

1) みかん大認知症カフェ

担当者：大西範和、小松美砂、清水律子

【事業要旨】

認知症やその介護は当事者にも家族などの介助者にも負担が大きいものの、ストレスを軽減する方策は限られている。近年各地に認知症カフェが誕生し、集い話す場の有用性が高いことが明らかになっていることから、本学のキャンパスや専門性を活かした認知症カフェを開催する。

【地域貢献のポイント】

認知症カフェでコーヒーの香りや味を楽しみながら会話をすることで、認知症の当事者・家族や介護者の日常的なストレスを緩和することができる。また、本学の専門性を活かした情報提供等の取り組みができれば、来場者の生活の質向上に寄与できる。さらに、本学学生や認定看護師教育課程の研修生や修了生が参加し交流の幅を広げることができれば、学生、研修生や修了生に認知症やその介護の状況への理解が進み、将来の看護の質向上に寄与できる。

I. 活動計画

平成30年6月9日（土）に開催される夢緑祭において、学祭の模擬店として認知症カフェを開く。近隣の認知症関連団体にチラシを配付して案内し、チラシの持参者には、無料でコーヒーを提供する。学祭の一般参加者の来店も可能とし、その場合は有料とする。開催場所は、学祭実行委員会と協議して決定するが、将来継続して開催することを想定し、学生食堂での開催可能性を含め、来場者から意見や感想を聴取して検討材料とする。カフェは担当者が学生と共に運営し、学生の活動の場としても活用することで学祭を盛り上げる。継続的に開催が可能であると判断された場合には、引き続き試験的な開催を検討する。

II. 活動の結果と評価

当事業は極めて順調に遂行することができ、学外でも事業を行うことができた。平成30年6月9日（土）に開催された夢緑祭において、学祭の模擬店として認知症カフェを開店した。近隣の認知症関連団体にチラシを配付して案内し、チラシの持参者には無料でコーヒー一杯を提供し、学祭の一般参加者に対しては一杯200円とした。若年性認知症の当事者4名、介護者、家族、本学認定看護師教育課程の修了生および研修生などを含む約120名の来場者を得て盛況となった。参加者が互いに交流して親交を深めている様子が見え、集い話す場として十分に機能したと推察する。認定看護師教育課程の修了生や研修生からは「改めて気づきをいただけるよい機会になりました。身をもって感じることで貴重な体験はないと思います。」、「認知症である方、そうでない方、学祭という雰囲気の中で、時、場所を共に過ごすことは大変良いと思います。」、「今後、1期生を始め、研修終了生が

お力になれば、三看大での認知症カフェの意義も深まるように感じております。」「本当の困りごとを知ることができ日々の生活の中で様々なことに不安や悲しみ、時には喜びを感じながら生活されておられるという事、失敗も次に活かすこと、自分自身でできる事を一生懸命やられている事に対し、心から感銘を受けた。」「何かを一緒に作ったり参加型のゲームなど、一緒にすることで距離が近くなったうえでのお話の場だと、お互いに構えずにもっと話せたのではないかと感じた。今後、何らかの形で認知症カフェに関わりたい私としては、参考になる部分も多く、また学生さんたちの一生懸命さも伝わってくる会であった。」などの感想が多数寄せられ、大変意義深い事業となった。学祭参加者からの収入は5,600円となり、認知症の当事者、その家族、支援者や一般の方が、1本のタスキを繋いで共にゴールを目指すイベント「RUN 伴（ランとも）」を主催するNPO法人「認知症フレンドシップクラブ」に寄付した。この認知症カフェには学部学生5名がボランティアとして参加した。また、平成31年1月27日（日）に三重県志摩市で開催された志摩市認知症・障がい福祉啓発事業「しまこさん福福（ふくふく）まつり」において志摩医師会が主催する認知症カフェに共催して出店した。若年性認知症の当事者4名、介護者、家族、本学認定看護師教育課程の修了生などを含む114名の来場者を得て盛況となった。来店者は笑顔で会話とコーヒーを楽しみ、初対面同士でも自然に交流していた。テーブルに置いたアンケートに回答いただいた9名中7名が認知症カフェという取り組みをご存じで、「よいことだと思います 頑張って」、「介護と看護がコラボしてってください」、「色々な地域に来てカフェを開催してほしいです。」などのご意見をいただいた。参加者には一杯100円でコーヒーを提供し、得られた11,400円は志摩市の認知症の人たちと家族や地域住民が集う認知症カフェ「志摩オレンジ」の活動費として運営団体に寄付した。この認知症カフェには学部学生2名がボランティアとして参加した。いずれの事業においても認知症の看護や介護に関わる団体同士の交流が進み、本学担当者もそれらの団体との関係を深めることができ有意義であった。

Ⅲ．今後の課題

事業実施に対する特段の問題は浮上していない。大変喜ばれていることから、今後も適宜見直しながら今後も事業を継続する予定である。認定看護師教育課程の修了生や研修生からは、よかった点だけでなく改善点についての提案もあり、今年度の事業で関係を深めることができた団体との連携も大切にしながら今後の計画を考えていきたい。



図．認知症カフェ開催の様子（左：学園祭にて、右：志摩市にて）

2) 災害に備えて

担当者： 大越扶貴、北恵都子、菅原啓太、竹村和誠、山本翔太

【事業要旨】

本事業はこれまでに構築された方法（夢が丘地区をフィールドとした学祭でのブース出展等）に加え、同地区を管轄する保健センター等の協力を得ながら老若男女の地区住民が自律的に防災・減災力向上が図れるよう取り組みを推進する。

【地域貢献のポイント】

1. ブース来場者を通じて、災害時の健康管理に対する平時の備えの知識を広く発信できる。
2. アンケート結果および津市の健康づくり計画における災害の取り組みに関する話題提供から、個人、地区組織、市地区担当保健師、本学で取り組む防災・減災対策の具体化が図れる。

I. 活動計画

【数値目標】

1. 啓発ブースの開設（年 1～2 回：学内）
2. 住民（代表）、地区担当保健師、本学学生、担当教員、地区組織とともに防災・減災対策の検討会議（年 1 回）
3. 防災に関心のある学生ボランティアの協力

II. 活動の結果と評価

1. 啓発ブースの開設

- 1) 本学のイベント（夢緑祭；2018 年 6 月 9 日）で災害ブースを開設し、（1）昨年のシールアンケート結果（住民の防災・減災意識と準備状況）を再度フィードバック、（2）災害時の健康管理にむけた日頃からの備えに関する情報発信を行った（本学 4 年生 2 名、3 年生 2 名がボランティアで参加した）。
- 2) 津市健康まつり（2018 年 10 月 7 日）で災害ブースを開設し、高齢者を対象としたテーマ（避難行動の心理とその対応、避難所における排泄や生活問題とその対策、避難所で生じる健康問題とその対応）でポスター掲示と防災グッズを展示した。
評価は対象者の理解度を測る目的でシールアンケートを用いた。

2. 夢が丘地区担当保健師および津市健康まつり災害ブース担当保健師と当日の運営目的について共有を図った。

【評価】

数値目標は、啓発ブースの開催と学生ボランティアの協力に関しては達成できた。津市健康まつりの啓発ブースでは、来所者の多くが高齢者でありテーマと合致したため災害時に避難所等生じる健康問題には強い関心を示した。一方で認知症に関するポスターについては質問が無く来所者の関心は低かった。

住民代表等との会議は、住民のニーズが的確に捉えられていないという理由で中止した。今回夢緑祭に参加していた地区住民に対して、昨年、夢が丘地区に全戸配布した既事業で作成した防災関連のチラシ（一般的な防災・減災知識に準じる内容）を殆どの人が見ていなかったためである。当日の参加者は過半数が防災グッズを用意しており、会社では災害時の Business continuity planning（BCP）を作成しているなどの意見も聞かれた。

Ⅲ．今後の課題

津市内においても住んでいるエリア（海岸近くか、山間部か）や自治会による取り組みの差もあった。したがって引き続き啓発活動は必要と思われる。しかしその方法に関しては、防災・減災に対する住民ニーズを的確に捉える必要がある。

3) アイルランドの伝統料理を作ろう

担当者： Myles O' Brien、林辰弥、清水真由美、小林奈津美

【事業要旨】

当事業に関心を持っている大学近隣の住民と教員が一緒になってアイルランドの伝統料理であるクリスプサンド、ブレッドプディングを作る。また、アイルランドの食文化に関する講話を聞き、伝統料理を味わうことでアイルランドの食文化について知る。

【地域貢献のポイント】

地域住民と本学の教員及び学生との交流を図るとともに、地域住民に料理を楽しんでもらい、異文化に対する理解を深めてもらう。

I. 活動計画

①数値目標：開催回数 1 回 参加人数 15 名以上

②活動スケジュール：

平成 30 年 11 月 大学近隣住民へ案内チラシを配布

12 月 必要物品の調達と会場準備

12 月 22 日(土) 開催

II. 活動の結果と評価

1. 広報活動

12 月 22 日(土)の開催までに、数回にわたり直接、またはメールにて担当で打ち合わせを行い、案内チラシを作成した。日本ではあまり馴染みのないクリスプサンドとブレッドプディングであるため、案内チラシに写真やどのような料理なのか簡単に記載した。また、昨年度ではチラシに「英語を交えながら料理をする」といった記載があり、昨年度の参加者から、「英語を話せないと参加できないのではないかと思った。」という声も聞かれたため、本年度はそのような記載はせず、より多くの方々に参加していただけるように作成した。参加申し込みの方法は、案内チラシに必要事項を記入し、大学へ Fax もしくは E-Mail で申し込んでいただくように案内チラシに載せた。11 月に大学近郊に案内チラシを配布し、本事業に興味を示してくれる方々への直接声かけも行い、参加者を募った。

2. 必要物品の調達と会場準備

開催前の打ち合わせで、材料調達等の準備の段取りを検討した。クリスプサンドではアイルランド製に近いイギリスのポテトチップスを使用し、様々な味を楽しんでもらえるよう手配した。開催 1 週間ほど前から担当で分担し、調理に必要な物品と食材を調達した。

開催前には会場となる本学生生活援助室を清掃し、シンク・調理台を消毒し、ボウル、まな板等の調理器具を準備した。

開催当日は、アイルランドの歴史・食文化についての講話の際に使用する液晶 TV とパワーポイントを準備した。

3. 開催

12月22日（土）10時～12時に、本学の生活援助室で開催した。参加者が揃い次第、ブレッドプディングの調理を開始し、オーブンによる加熱中に担当者がアイルランドの歴史・食文化について講話を実施した。その後、クリस्पサンドを調理・試食し、焼きあがったブレッドプディングを試食した。試食の際には、参加者からの質問に答えるなど、交流を図った。

以下写真 1, 2, 3, 4 に当日の風景を示す。



1



2



3



4

4. 評価

参加者数：8名（10歳未満：2名、30歳代：2名、40歳代：1名、50歳代：1名、60歳以上：2名）。学生の参加はなし。

数値目標としていた、1回の開催は実現できたが、参加者数は15名に達せず、昨年度と参加者数は同じであった。参加者は大学近郊の住民であり、回覧板やチラシを見て本事業を知り、親子や近所の友人と参加していた。今年度は、英語を話さなければならないといった誤解を与えず、より多くの方々に参加してもらえるようにチラシの内容を修正したが、残念ながら、参加者の増加は見られなかった。広報活動については、今回は大学近郊の住

民にチラシを配布するのみであったが、今後は配布の範囲を拡大したり、ラジオや市の広報誌を活用したり、チラシを配布する以外の広報活動を行うことも数値目標達成には必要であると考える。

本事業開催後、参加者へアンケートをとり、6名から回収した（子ども2名は未回収）。アンケート結果より、本事業に対して「楽しかった。」、今後も本学のイベントに「是非参加したい。」と全員が回答していた。自由記述は、「子供も楽しく参加できました。とても簡単なので、また家でも作ってみようと思います。ありがとうございました。」「日頃勤務で地域の人たちとの関係が疎遠なので、このような機会を作って頂き、とても有難いです。今回はおいしくて、楽しかったです。」「とても簡単にできる料理なので家でもできそうです。欲を言えば、ごはんのおかずのようなものも作ってみたいです。」等、参加して良かったという意見が多く、次回の開催に向けた希望なども聞くことができた。

また、クリस्पサンドは全員が同じテーブルで好きな味を選んでもらい参加者と担当者がお互いに美味しかったものを話しながら調理し、ブレッドプディングではテーブルは2つに分かれていたが、3-4人のグループに担当者がそれぞれ入り調理することでお互いに親近感を持つことができた。さらに、毎年参加してくれる参加者もあり、4年間の継続した活動が地域住民同士の交流と地域住民と大学との交流を深めることに繋がったと考える。

Ⅲ. 今後の課題

開催後のアンケートから、本事業は好評であったと考えられるため4年間継続して実施した。アイルランドの伝統的な料理であるクリस्पサンドとブレッドプディングを実際に調理し、そして、アイルランドの食文化を紹介するという本事業の内容は、参加者が楽しみながら異文化を理解することにつながったと言える。新たな参加者の動員のため、周知方法の検討が必要である。また、内容としては新たな参加者でも気軽に参加できるように調理が簡単であり、アンケートで希望されたおかずなどになるものを検討し、今後も継続して参加される方にも楽しんでもらえるような同様の事業を実施していく予定である。

4) 英語で話そう

担当者： Myles O' Brien 林 姿穂

【事業要旨】

津市在住の方々へネイティブ教員による「英語で話そう」という英会話の授業を行う。リラックスした雰囲気の中で、基本的な英語表現を学びながら、同時に参加者同士の交流も楽しむ。参加者の関心に応じて話題を提供する機会も設ける。

【地域貢献のポイント】

津市住民が「英語を楽しむ」という活動を通じて、英語に対する親しみを持つようにする。夢が丘の住民の方だけでなく、津市住民への、本学の周知と、地域の方々との交流の機会を広げている。また、様々な世代の方に参加いただくことで、世代を超えた交流も視野に入れている。

I. 活動計画

①数値目標：参加人数 8 名程度

授業回数全 7 回

②授業内容：初心者向けの基本的な語彙や表現を教授し、日常英会話を楽しめるようにする。

1. 参加募集時期

平成 30 年 10 月に、近隣団地へのチラシの配布や大学の H P にて広報を行い、6 人の応募があった。

2. 開催時期

平成 30 年 11 月 1 日から 12 月 13 日の毎週木曜日 14 : 00 ~ 15 : 00 (計 7 回)

3. 授業

毎回、「週末をどのように過ごしたのか」等を受講者に質問して、受講者が自分の体験や気持ちを英語で積極的に表現できるようにサポートした。また受講者の英語の発話内容に対して、よりよい英語表現を提案し、ホワイトボードにそれを書き記すことで、英語力の向上を図った。

II. 活動の結果と評価

参加者の英会話のレベルには多少の差はあったが、受講者全員が英語を話すことに積極的であり、昨年と同じメンバーだったので、打ち解けた雰囲気でありあまり問題にはならなかった。また、受講者が特定の英語表現についての質問をしたときには、担当講師から言葉のつかい方の詳しい説明があった。終始和やかな雰囲気の中で授業が進行し、皆がリラックスして英会話を楽しむことができたと考える。

授業の具体的な内容としては、毎回、参加者全員にその週に起こった身近な出来事を英語で表現してもらい、それを題材にして英会話を展開するという方法をとった。この方法

には二つの大きな利点があった。第一に、参加者の事前学習や英語への関心を高めるきっかけづくりになった。第二に、参加者全員が、教科書や参考書には載っていない日常表現をネイティブ教員から学ぶことができた。

さらに今年度は、ネイティブ教員が新聞や雑誌の風刺やアイロニーの絵の意味を説明した。これにより、日本とは異なる、英語圏のユーモアや発想の違いを学ぶことができた。

Ⅲ．今後の課題及び今後に向けての計画

今年度の受講者からクラスの継続に対する強い要望があったので同様の機会を提供したいと考え、来年度も本事業の継続を計画している。

5) ケアの哲学カフェ

-立場をこえて話し合おう-

担当者：浦野 茂・林 辰弥・安部 彰・関根由紀・鈴木聡美

【事業要旨】

この事業の目的は、病いや障害、成長と老いそして死など、ひろくケアにかかわりのある事柄をテーマとした哲学カフェを開催することである。これを通じ、保健医療福祉従事者や病気・障害の当事者、その家族など、職種や立場、経験において多様な参加者が、自身の経験に根ざしつつもその認識を広げ、理解を深めてゆくことのできる場を作ることを目指している。

【地域貢献のポイント】

機能分化の進んだ現代社会では、保健医療福祉従事者や病気・障害の当事者、その家族等がそれぞれの立場をこえて見解を交わし合う場と機会は限定されていく傾向にある。こうしたなか、哲学カフェやサイエンスカフェなど、専門的な知識や事象をめぐる一般市民による対話の場が広がりつつある。この状況を踏まえ、医療保健福祉にかかわりあるテーマをめぐる哲学カフェを実施することにより、三重県を中心とした地域住民に対し、本学ならではの貢献ができると考えている。

I. 活動計画

職種や立場、経験において多種多様な参加者を得ながら、保健医療福祉に関わりあるテーマの元に、それぞれの経験や理解をゆっくりと言葉にしていくことのできる場を作ることが、この事業の重点課題である。したがって目標としたのは、知識の獲得やコンセンサスへの到達ではなく、多様な語りを得ることを通じ、テーマについての認識を多様化・精密化させていくことである。

II. 活動の結果と評価

本年度は全1回の哲学カフェを実施する。その内容は次のように予定している。

1. 開催情報

- ・日時：2019年3月4日（月）、18時～20時
- ・場所：橋北公民館和室（アストプラザ4階）
- ・参加者：15名程度（一般市民・本学卒業生）・本学スタッフ

2. テーマと背景

本年度の哲学カフェは、「共感するってどういうこと？」というテーマのもとに対話を行う。以下、その内容と背景について説明する。

共感という現象には一般に、望ましいことという含みがある。共感的に人の話を聴

くことはあらゆるところで勧められている。共感的な人と聞いて、その人のことを悪人と思う人はそういないだろう。病いや障害をわずらう人に共感的に関わることは素人にとっては道徳的に、また専門支援者にとっては職業的に期待されている事柄である。

このように共感することの善が自明視されている。けれども、共感にまつわるさまざまな謎や疑問もある。

たとえば、人の気持ちはわからないと言われるのをよく耳にする。もしもその通りだとすれば、私たちは他人に共感することはできないということになる。だとするとこれまで求められてきた共感とは何だったのか、考え直さざるをえなくなるだろう。

また、かりに何らかの仕方で共感ができるにしても、共感することは本当に望ましいことだろうか。悪人に共感することはしばしばあることである。そしてそれはその罪を致し方ないこととしてしまいかねない。そしてそれは問題であるとしばしば指摘されてきた。また、共感がかえって職業の遂行の妨げになるといったこともあるかもしれない。

さらに話を広げていけば、共感をその一部として含む職業にはさまざまな問題があることが指摘されてきた。そのような職業のことをかつて A. R. ホックシールドは「感情労働 emotional labor」と呼び、そのなかで自身の感情を酷使させられている感情労働者たちの苦境を明らかにしてきた。これは看護師や介護士といったケア労働者に限った話ではなく、どのようにしても人付き合いから逃れられない現代社会に生きる私たち全員の苦境なのかもしれない。もちろん、そこには性差による共感への期待のあり方が異なっていることも見逃すことはできない。

このようにざっと拾い上げてみるだけで、共感という現象の内側とその周囲には再考を要する問題が数多く存在している。そしてこの問題は、共感とその望ましさが自明視されているからこそ、当たり前の日常生活をあらためて言葉にしていくことから接近していくのがふさわしい、そういった問題であるように思われる。

本年度の哲学カフェのテーマとその背景について説明すると、以上のようなになる。

IV. 今後の課題

明確なテーマ設定のもと、継続的に安定した形で哲学カフェを開催することが今後の課題である。

6) シネマで倫理学

担当者： 安部彰・中西貴美子

【事業要旨】

映画は、その絶大なるイメージ喚起力によって私たちの思考と感情の双方を賦活してくれる。また、そのような効果をもつことから映画は、倫理についてまなび・かんがえるためのツールとして大学教育でも積極的にもちいられている。だが、私たちが生きるこの時代に倫理についてまなび・かんがえることは、大学生だけに必要なことなのか。もちろんそうではない。なぜなら価値観の多様化が進む現代では、倫理観の食い違いや対立もますます深まっているようにみえるから。またそのような状況への諦念からか、そもそも倫理問題への関心じたいが減退しているようにみえるから。でも、想像力を発揮してみてほしい。すると明らかなように、現代の倫理問題の多くは、誰もがその当事者となりうる問題である。つまりそれは公共的な問題なのだ。だから学生のみならず人々が共同して探求する必要がある問題なのだ。だから本業のねらいも、そのような機会を提供する場となることにある。またそうして、現代の倫理にかかわるテーマを扱った映画を糸口に、さまざまな倫理的な論点や問題にかんする参加者の関心・理解・考察を深めてもらうことにある。

【地域貢献のポイント】

倫理問題のような公共的な問題への取り組みには、多様な人々がその多様性を保持したままおこなう共同探求が不可欠である。そのような探求の機会の提供こそ、本事業の地域貢献のポイントにほかならない。本事業が提供する学生・医療従事者・近隣住民など多様な人々が織りなす共同探求の経験は、将来的には地域が抱える諸問題の探求へと人々を誘う契機ともなるかもしれない。

I. 活動計画

数値目標：年1回の開催。参加人数 50 人。

II. 活動の結果と評価

1. 開催情報

- 1) 日時：2019 年 3 月 23 日（土）13 時～16 時
- 2) 場所：三重県立看護大学 大講義室
- 3) 参加人数：30 名程度（近隣住民・本学学生 20 名・本学教職員）

2. 活動の結果

映画を視聴し、上映後には事業担当者によるミニレクチャーと提題、そして参加者間で意見交換をおこなった。

今回上映したのは『ガタカ』（1997）という SF 映画である。本作品は一部の映画ファンのあいだでは評価の高い、隠れた名作でもある。映画の舞台となる近未来の世界では、

遺伝子テクノロジーが発展し、子どもの属性をさまざまに選択してうむことができるようになっていく。だが生殖の自由が拡大したこのような世界は果たして人類がめざすべきユートピアなのか。そう遠くはない将来、もしかしたら現実のものともなりかねない『ガタカ』の世界観を共有し、そこから生殖医療の現在を逆照射することで、生殖医療の倫理問題を共同探求することができた。

3. 活動の評価

参加者における本学学生の割合が高かった理由については、次のようにかんがえている。すなわち事業担当者の担当授業「現代の倫理」（1年生対象・後期選択科目）の教材として『ガタカ』をもちい、その一部を視聴したことにより、映画の内容はもちろんのこと、さらには生殖医療の倫理問題についても受講生の関心をひきだすことができたからではないか。もしそうなら担当授業と本事業をリンクさせるという運営スキームは今後も有効だろう。さらには、学生にとって本事業への参加は、近隣住民との交流機会や、世代の異なる参加者らの多様な声に触れるポリフォニックな経験の場ともなるかもしれない。

|

Ⅲ. 今後の課題

本事業にたいし参加者から寄せられた意見をうけとめ、さらなるニーズの充足や運営面の改善に努めつつ、継続する。

7) 学生による地域に対するボランティア支援

担当者： ◎林辰弥、川島珠実、菅原啓太

【事業要旨】

教員が学生と一緒に地域のボランティア活動に同行・参加することにより、ボランティアに参加する本学学生の人数を増やし、できるだけ多くの学生のボランティアに対する意識を高め、さらにはその醸成を目指すとともに、その活動により地域に貢献する。

【地域貢献のポイント】

学生と一緒にになって三重県内のボランティア活動に同行・参加し、それぞれの地域におけるニーズに答えることにより地域に貢献する。

I. 活動計画

本年度は事業開始2年目だが、ボランティアへの参加件数を5件、ボランティアに参加する学生数を10名以上とした。

II. 活動の実際および経過

1. げいのうわんぱーく（平成30年9月4日および12月23日、於げいのうわんぱーく）、4名
2. 県立総合医療センター災害訓練（平成30年11月17日、於県立総合医療センター）、10名
3. 三重県赤十字血液センターでの献血（平成30年12月19日、於三重県赤十字血液センター）、6名
4. スポーツレクリエーションフェスティバル2019（平成31年3月3日、於県営松阪野球場）、11名（現時点）

III. 活動の結果と評価

1. げいのうわんぱーくにおけるボランティア

本ボランティアには、2年次の学生4名の参加希望があり、教員1名が同行した。ボランティアの内容としては、室内で小学生までの子供たちが各種遊具で遊ぶのを見守るもので、学生の都合上、2回に分けてボランティアに参加したが、参加した4名共に楽しくボランティアに参加できたとの感想を持っていた。

2. 県立総合医療センター災害訓練におけるボランティア

本ボランティアには、2年次の学生5名と4年次の学生5名が参加した。教員は参加登録までの過程には充分に関わることができたが、県立総合医療センター災害訓練

当日が本学の特別推薦入試の日と同日であったため、残念ながら、同行することはできなかった。ボランティアの内容は主に、災害時の患者役であり、訓練後にトリアージの色別にどのように対応するかを決める様子も見学できたようで、ボランティアに参加しつつ、災害時の医師や看護師の動きを観察できたことは、参加学生にとって収穫だったように思われた。

3. 三重県赤十字血液センターでの献血ボランティア（写真1－4）

日本では、少子高齢化が進むにつれ、全国的に若い世代からの献血が少なくなっており、三重県もその例にもれず、若い世代からの献血者が減少し、特に10代、20代からの献血率は全国最下位が続いている状況である。このような現状を憂えた三重県赤十字血液センターからの依頼もあり、三重県における若年者からの献血率の上昇に寄与することを考え、1年次から4年次の学生全員に対して献血ボランティアを募ったところ、2年次の学生6名から参加希望があり、三重県赤十字血液センターの職員と共同して、津駅付近にある三重県赤十字血液センターへの送迎を行った。種々の検査の結果、学生6名中3名は献血することができなかったが、残りの3名が200mLの血液を献血することができ、わずかながら、若年者における献血率の上昇に寄与できたと考えられた。参加した学生も、普段、献血バスにおける400mL採血では体重等の関係で献血できなかったのが、200mL採血では献血できたことに満足しており、今後も継続的に献血したいとの声が聞かれた。



写真1



写真2



写真3



写真4

4. スポーツレクリエーションフェスティバル 2019 でのボランティア

本ボランティアについては、3月3日に県営松阪野球場におけるスポーツレクリエーションフェスティバルに付随したもので、現在、全学年の学生にボランティアへの参加者を募っており、現時点では1年次の学生9名と2年次の学生2名が参加する予定であり、教員は主として学生ボランティア活動支援委員会の委員として同行する予定である。その内容は、昨年と同様に本年度もスポーツフェスティバルに参加した子供たちが楽しめるように、三重県の市町村のゆるキャラの着ぐるみを着るか、あるいはそのゆるキャラを誘導する役割を、学生は、二人一組になり、午前と午後の2回、1時間から2時間、ゆるキャラの着ぐるみを着る学生と誘導する学生が適宜交代して実施するものになると考えられ、昨年度にボランティアに参加した学生からは、着ぐるみは少し重たかったが、子供たちが喜ぶ姿を見ることができて楽しかった、などの声が聞かれたことから、本年度も、参加学生には楽しみながらボランティアに参加してもらえんと考えられた。

本年度の活動に関しては、学生ボランティア支援委員会の委員として同行した活動を含めた場合、件数は4件と少なかったが、学生の延べ参加人数は約31名と当初の目標を十分に上回ることができた。

IV. 今後の課題

本年度は、4件のボランティアに関して、構成員が手分けして学生のボランティアに同行・参加した。いずれのボランティアについても、多くの学生から「楽しかった」との声が聞かれたことから、学生にボランティアの楽しさを経験させる手助けができたと考えられた。この4件のボランティアについては、その半数以上が学生ボランティア支援委員会の委員として同行・参加したものであるため、次年度からは学生ボランティア支援委員会の業務の1つとして実施していく選択肢も考えられた。

Ⅱ．卒業生支援事業

1. 卒業生のきずなネットワーク

担当者： 中北裕子、林辰弥、灘波浩子、長谷川智之、川島珠実、北恵都子、竹村和誠
岡根利津、小林奈津美、山本翔太

【事業要旨】

卒業生が看護職としての職責を継続して果たせるよう、様々な相談に対応し、燃え尽きおよび離職防止を図る。また同窓会と連携をとり、卒業生、同窓会との情報交換を行うことにより、卒業生と大学との関係性の維持にも努める。

【地域貢献のポイント】

仕事上の悩みや複雑な人間関係を経験し、離職を考えることが多い卒後 1～2 年までの卒業生を対象に、母校である大学がハード面とソフト面の資源を提供し、フォローすることで離職防止を図る。この活動によって、卒業生が持続的に質の高い看護ケアを社会に提供できることは、地域住民および社会に対しての貢献につながると考える。

I. 活動計画

【数値目標】

1. 昨年度本学を卒業した人を対象に茶話会（夢緑祭当日、3 月）を開催する。

（出席者数各会 30 名程度を目標とする）

2. 卒後 2 年目を対象に茶話会（3 月）を開催する。（30 名程度を目標とする）

本事業は、平成 23 年度からの事業を引き継いだ単年度の事業である。平成 29 度より交流センター提案事業となったが、これまでの茶話会参加者からのアンケートをもとに、以下の茶話会を企画した。

【茶話会の開催】

1. 卒後 1 年目の卒業生（卒 1）を対象とした茶話会を夢緑祭当日（開催日は平成 30 年 6 月 9 日）と平成 31 年 3 月 2 日に開催する。

2. 卒後 2 年目の卒業生（卒 2）を対象とした茶話会を平成 31 年 3 月 2 日（卒後 1 年目の卒業生を対象とした茶話会と同日）に開催する。

3. 就職先の情報交換や、同窓生、教員と何でも話ができる場とする。

全体会終了後、個別に本学教員に相談できる時間をもつ。特に 3 月の茶話会は 2 学年が同時に集合する場とすることで、横のつながりだけでなく、縦のつながりを深める機会を作る。

4. 茶話会の開催に向けて

- 1) 茶話会の案内を卒業生の就職先に郵送することにより広報活動を行う。
- 2) 卒業生には卒業生アドレス等を活用して、会への出席を呼びかける。
- 3) 同窓会には開催を事前に伝えることにより、同窓会との橋渡しを行う。
- 4) 教職員にも開催周知と共に、参加協力を依頼する。

5. 茶話会の開催後

- 1) 茶話会終了後には、参加できなかった同窓生へのメッセージをまとめて卒業生アド

レス等を活用して、配信する。

- 2) 茶話会への参加協力についてのお礼の文書を参加者の就職先に郵送する。
- 3) 茶話会のアンケート結果から、振り返りと次回茶話会に向けての課題を検討する。

Ⅱ．活動の結果と評価

1. 茶話会開催のための広報活動の結果および評価

第1回目の茶話会後のアンケート結果より、茶話会について知ったきっかけで最も多かったのは「看護部からのチラシ」であり、次いで「本学の教員」であった（図1）。就職先を通じて連絡を受けた者は、上司より「いい機会だから母校に行ってらっしゃい」と促されたり、勤務の調整、出張扱いや旅費の支給等、就職先の協力が得られていた。これらは卒業生の就職先において、平成23年度からの本学の継続した卒業生支援への理解が広まってきている結果であると考えられる。開催後には、協力いただいた看護部長宛に、本事業に対するご理解とご協力へのお礼を文書にて伝えることで、今後の本学における卒業生支援に対する更なる理解につながっていくものと期待する。

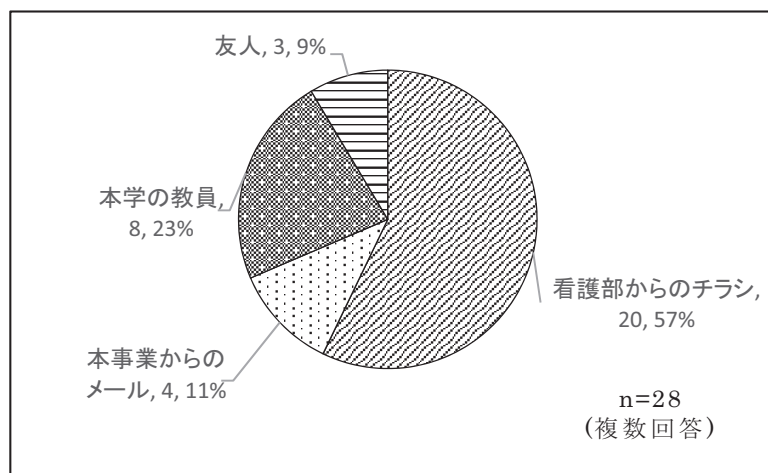


図1. 茶話会を知ったきっかけ

2. 茶話会の結果および評価

1) 第1回茶話会

参加人数は卒1が31名、教員が9名の計40名であり、目標は達成された。会場設営は、テーブルを卒業生と共に配置し、参加者が自由に着席できるようにした。卒業生は順次、近況と共に仕事上の悩みや自己の成長を交えながら和やかな様子で報告し、茶話会の終了時間を過ぎてからも話し込む光景が見られた。

アンケートの自由記載欄には「久しぶりに会えた子が多くて、お話しできて楽しかった。それぞれ違う場所でもみんな頑張ってるんだなと思った。」「仕事で悩んでる人も、きっと今日の会で少しスッキリできるんじゃないか、そう感じられる会でとても良かったです。」「卒業してから、このような機会をつくっていただけるのはありがたいです。」といった感想が書かれていた。

当日参加できなかった同級生へのメッセージには、「みんな頑張っているから自分も頑張ろうと思えました！がんばりましょー！」「すごく楽しかった！！学生時代に

戻ったみたいで、来れてよかったです、また頑張ろうと思いました。またみんなと先生に会いたい！！」、「久しぶりに話せたことが楽しかった。就職が三重ではないので、久しぶりに三重に来ると、非日常的な感じがすごくりフレッシュできた。」などが書かれていた。これらのメッセージと次回開催日時を、Outlook メールにて卒 1 全員に配信した。

茶話会の内容に対する参加者の満足度は、アンケートより 89.0%の参加者が「とても満足」、7.0%の者が「やや満足」、4.0%の者が「どちらともいえない」という結果を得た（図 2）。また、3 月に同様の企画を行うことについては、参加者の 89.0%が「とても満足」、7.0%が「やや満足」と答えた（図 3）。

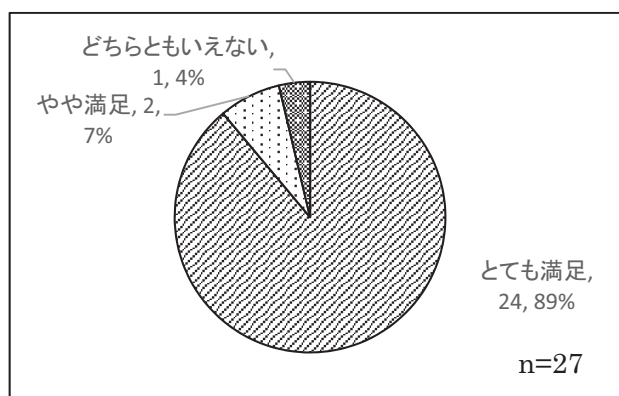


図 2. 会 の 内 容 に つ い て

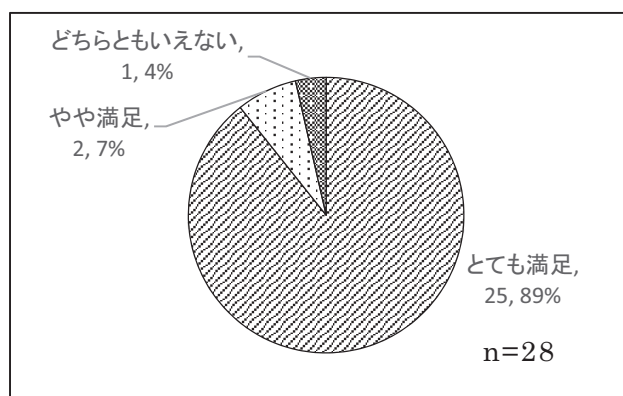


図 3. 3 月 に 同 様 の 内 容 を 行 う こ と に つ い て

大学が行う卒業生支援として希望するものは、今回のような茶話会・懇談会が最も多かった（図 4）。

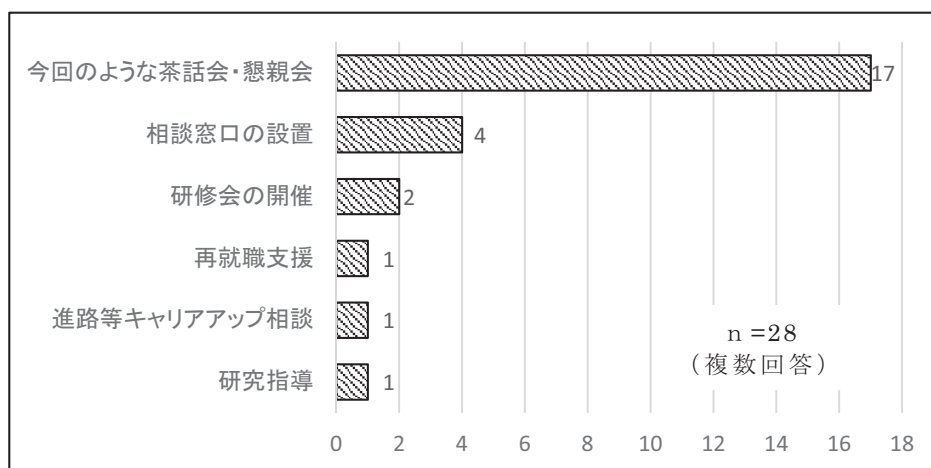


図 4. 卒 業 生 支 援 と し て 希 望 す る 内 容 に つ い て

3) 本事業の評価

アンケート結果より、本事業は卒業生のニーズと合致したと同時に、卒業生と大学との関係性の維持に寄与できたと考える。また、卒業生の就職先から、出席に関する協力を得られたことは、本学の卒業生支援を継続してきたことの成果と評価できる。

茶話会以外では、卒 1、卒 2 に加えて、卒 3 以上の卒業生からも本事業担当教員のも

とに、就職先での人間関係や再就職等について延べ30件余りの相談（来学、メール、電話）があり、卒業生全体に対する支援が実施できたと考える。

Ⅲ．今後の課題

茶話会終了後のアンケートより、本学教員による卒業生支援のニーズは高いことから、今後も本事業を継続的に実施していく必要があると考える。

対象となる卒業生への周知方法として、就職先を通じてのチラシの配布と在学時のメールアドレスへの情報配信を行っている。就職先を通じてのチラシの配布については、上司から参加を促していただける場合があるが、該当者が退職している場合もあり、確実な方法とは言い難い。また、在学時のメールアドレスは、卒業すると活用することが減り、確認が遅くなることもあるため、継続して連絡が取れる方法を検討していく必要がある。

茶話会の開催以外にも、研修会の開催、再就職支援、進路等キャリアアップ相談、相談窓口の設置等の支援ニーズがあることを本学教員で共有し、卒業生支援を大学全体として実施していくことが必要である。



2. 卒業生支援構想プロジェクト

担当者：大西 範和、斎藤 真、岩田 朋美、濱口 幸美、武笠 元紀、棚尾 仁美、
地域交流センター委員

【事業要旨】

平成 29 年度に設置された卒業生支援構想プロジェクトの検討結果を踏まえ、卒業生支援の方向性や方法等について、同窓会役員を交えて検討を進め、地域交流センターや同窓会や高大接続プロジェクトチームなどに対する提言を行い、卒業生の能力向上やキャリアアップ、復職支援活動などに活かす。

【地域貢献のポイント】

同窓会を中心に卒業生を支援し、リカレント研修やキャリアアップなどに寄与することにより、県内の看護の質的な向上に貢献する。さらに、卒業生の復職支援等につながるよう事業を行うことにより、県内の看護職の確保に貢献する。

I. 活動計画

1. 卒業生支援の方向性や方法等について、本学出身の教員、大学院生や人事交流で在籍している卒業生とともに検討会を 2 回程度開催する。
2. 地域交流センター委員と同窓会役員を交えた意見交換会を 2 回程度開催する。
3. 卒業生支援企画を 1 件実施する。

II. 活動の結果と評価

概ね計画通りに事業を展開した。平成 29 年度に引き続き同窓会総会及び講演会の開催を支援し、「卒業生のきずなプロジェクト」の事業と連携して、スムーズなスケジュールで開催できた。また、同窓会役員、本学出身の教員、大学院生や人事交流で在籍している卒業生、地域交流センター委員等との意見交換を進めた。卒業生の同窓会活動への参加意識を高める仕掛け、同窓生対象の就職説明会、シミュレータを活用した研修会、専門看護師等の資格を持つ同窓生の講演会や研修会などの開催、連絡への「LINE」の活用などといった平成 29 年度の話し合いの内容については、同窓会に説明し意見交換を行った。その結果をもとに、平成 31 年 1 月 23 日（水）に検討会を実施し、キャリアを考える卒業 10 年目あたりの時期に卒業生が顔を合わせる機会を持つ重要性や、シミュレータ研修を行いそれに修了証を出すこと、修了者を中心に所属の機関単位で研修を行うことが可能性であること、卒業生が人事交流で在籍することが多く、それができれば所属機関での活躍の場が広がることなどが話し合われ、同窓会や地域交流センターに提案することとした。

III. 今後の課題

当プロジェクトにおいて話し合われた内容は、同窓会や地域交流センターに提案として伝えている。有用なものについては、今後その具体化について連携してあたる必要がある。

Ⅲ. 受託事業

1. 新人助産師の臨床実践能力育成のための研修体制構築

担当者： 永見桂子、大平肇子、岩田朋美、松本亜希、堂本万起、市川陽子

【事業要旨】

三重県では、保健師助産師看護師法および看護師等の人材確保の促進に関する法律の改正に伴い努力義務化された新人看護職員研修の導入および実施を促進することをおして、助産師の離職防止・県内定着、資質向上を図っている。

本事業は、厚生労働省策定の新人看護職員ガイドラインにおける助産師が就労後1年間で到達すべき助産技術の到達目標、助産技術を支える要素「母子の医療安全の確保」、「妊産褥婦および家族への説明と助言」、「的確な判断と適切な助産技術の提供」に則り、三重県内の医療施設で働く新人助産師の臨床実践能力育成を支援することを目的とする。

【地域貢献のポイント】

三重県内の医療施設で働く新人助産師の学習ニーズに応え、継続的な卒後教育プログラムの提供をおして臨床実践能力育成を支援することにより、新人助産師のキャリアディベロップメントに資する。

三重県内の医療施設で働く新人助産師の臨床実践能力育成を支援することにより、地域住民に提供される看護の質向上に寄与する。

I. 活動計画

三重県より「平成30年度三重県新人助産師合同研修事業」を受託し、研修計画の策定、方略の検討により、新人助産師が就労後1年間で到達すべき助産技術修得を支援する。昨年度より5日間（9：00～16：10）から4日間（9：30～15：30）の研修へと日程・時間数が縮減されたが、研修内容への肯定的回答を得ており、研修のねらいの明確化を意図して昨年度掲げた「新人助産師集合!!三重の仲間で“わかち合い”“みがき合い”“高め合おう”」を今年度もテーマとし、新人助産師の実践能力獲得を支援し、新人助産師同士の交流を深め、助産師としてのモチベーションを高めることを目標とした。

重点課題および数値目標は以下の4点とする。

1. 三重県内の医療施設で働く新人助産師のニーズ調査結果を平成30年度卒後教育プログラムに反映できる。
2. 継続的な卒後教育プログラムの提供に向けて三重県内医療施設の産婦人科医、小児科医、助産師等関連専門職者との連携を強化できる。
3. 新人助産師同士の交流を深めることができ、研修修了後には助産師活動の現状や課題を共有できた、専門職者として研鑽し続けたいなどの回答が得られる。
4. 企画した新人助産師合同研修に県内新人助産師30名程度が参加し、4日間の研修において過去7年間の研修参加率（平均90.0%）の水準を確保できる。

Ⅱ．活動の結果と評価

1．研修プログラムについて

平成 30 年 10 月 6 日（土）、11 月 3 日（土）、12 月 8 日（土）、平成 31 年 1 月 12 日（土）の 4 日間の研修プログラムを策定した。研修初日には授乳困難の原因や哺乳行動のメカニズムを理解し、ロールプレイや事例検討をとおして「母乳育児への支援の実際」を学ぶ機会とした。新人助産師同士の交流をとおして自らの助産師としての未来像を描くワークショップ体験となるべく「ワールドカフェによる交流会」を設けた。2 日目には臨床での体験事例をもとに「社会的ハイリスク妊産婦の看護の実際」、「MFICU での妊産婦の看護」、「ハイリスク新生児の看護」について理解を深め、産科と NICU 双方の観点から「周産期母子ケアにおける連携」について討議し、助産師の果たす役割を考える機会とした。3 日目には「早期新生児のアセスメント」、「出生後の異常の評価と対応」について学び、「ケースシナリオを用いたグループディスカッション」をとおして、早期新生児のアセスメントのポイントを言語化し、適切な看護方法を導き出すプロセスを共有するとともに、チーム医療に求められるコミュニケーション能力強化を目指した。4 日目には産科危機的出血など「分娩時の緊急対応」について学び、母子の医療安全確保について考察を深め、さらに「診療ガイドライン 2017」での CQ のポイントを臨床場面に照らして整理し、周産期医療ケアにおけるガイドラインの意義について理解を深める機会とした。また、事例検討会「事例に基づく助産師の判断と看護実践」では 8 施設から提供された困難事例について討議し、対象の特性や状況に応じた医療的介入・助産ケアの選択と応用について考察する機会とした。

2．研修参加者の受講状況について

8 月に県内医療施設 109 施設（病院 22 施設、診療所 51 施設、助産所 36 施設）に開催案内を送付し参加者を募集した。応募者数は 26 名であり、4 日間皆出席者は 23 名（88.5%）、3 日間 2 名（7.7%）、2 日間 1 名（3.8%）であった。研修各日の参加者数と参加率は、1 日目 26 名（100%）、2 日目 25 名（96.2%）、3 日目 25 名（96.2%）、4 日目 24 名（92.3%）であり、過去 7 年間の研修参加率（平均 90.0%）以上の水準を確保することができた。研修参加者のうち、看護師の臨床経験を有する者は 4 名（1 年 2 名、4 年 1 名、15 年 1 名）であった。就業場所は病院 25 名（うち周産期母子医療センター 17 名）、診療所 1 名であり、配属部署は産科 25 名、NICU 1 名であった。研修初日の時点で分娩介助経験ありと回答した者 13 名（52.0%）、なしと回答した者 12 名（48.0%）であった。

なお、本学卒業生（県外就職者である卒後 1 年目の助産師 5 名）にも開催案内を行い、2 日目に 3 名が聴講した。また、本学助産師課程選択生（4 年生）のべ 5 名がボランティアとして参加した。

3．研修参加者の自己評価について

研修初日の自己評価シート（回答者 25 名）には、研修前の学習ニーズ・研修への期待として「新たな知識・より深い知識の獲得」、「実践に活かせる学び」、「助産師としてのスキルの獲得」、「助産師としての自覚・助産観の醸成」、「他施設の助産師との交流・悩みの共有」などが挙げられ、助産実践能力の向上のみならず、日常業務のなか

での悩みの解決、助産師として働くモチベーションの維持を期待していた。

研修修了時の自己評価シート（回答者 26 名）では、自分自身の課題として「適切な知識・技術やアセスメント能力の獲得」、「根拠をもったケアの提供」、「異常時・急変時の対応力」、「報告・連絡・相談とコミュニケーション能力の強化」、「焦り・自信のなさ・消極性の克服」などが挙げられ、課題達成に向けた取り組みとして「疑問をそのままにせず調べる」、「体験事例を丁寧に振り返る」、「その場で相談し先輩の助言を得る」、「目標をもち達成状況を確認する」などが挙げられた。

4. 新人助産師合同研修に関する評価について

研修修了時の新人助産師合同研修に関するアンケート（回答者 26 名）より、4 日間の研修内容についてよいと回答した者は 17 名（65.4%）、まあまあよい 9 名（34.6%）であった。その理由として、「幅広く様々な知識を得ることができた」、「実践に活かせる内容であった」、「様々な分野の講師の話を聴くことができた」、「日常を振り返りながら他者の意見を聴くことができた」、「ディスカッションをとおして考えることができた」などが挙げられた。特に「母乳育児への支援の実際」、「ケースシナリオを用いたグループディスカッション」、「事例検討会」などへの肯定的回答が得られた。

事例検討会についてはよいと回答した者は 13 名（54.0%）、まあまあよい 10 名（42.0%）、無回答 1 名（4.0%）であり、「様々な事例についていろいろな方向から考えることができた」、「施設は異なっても共通する悩みを抱えていることがわかった」、「他施設の意見や産科医師の助言に視野が広がった」などが理由として挙げられた。一方で「事例が多く 1 事例を深めるほうがよい」、「1 事例ごとの時間が短い」などの意見もみられ、事例をしばらくじっくり時間をかけて意見交換することも課題といえる。

本研修が助産師としての基本的知識や技術の修得につながる研修であったと回答した者は大変そう思う 15 名（57.7%）、まあまあそう思う 11 名（42.3%）であり、助産師としての意欲の向上につながると回答した者は大変そう思う 14 名（53.8%）、まあまあそう思う 12 名（46.2%）であった。本研修を受講し今後も自己研鑽の機会を得ようと思うと回答した者は大変そう思う 14 名（53.8%）、まあまあそう思う 11 名（42.3%）、無回答 1 名（3.8%）であった。また、今回の研修をとおして、「母乳育児支援」、「産科救急時の対応」、「ハイリスク妊産婦・新生児への関わり」などが今後取り組むべき助産師としての新たな課題であるにとらえており、助産師としての実践能力を高めるためには、「自己研鑽の継続と繰り返し」、「机上の学習と臨床をつなげる教育」、「3 年目、5 年目の研修」、「先輩助産師から学ぶ機会」などの卒後教育が必要だと考えていた。

以上より、本研修は新人助産師の実践能力獲得を支援し、新人助産師同士の交流をとおして、助産師としてのモチベーションを高め、専門職者として自己研鑽し続けようとする姿勢の醸成に資する内容を提供できたものとする。

Ⅲ. 今後の課題

新人助産師は、周産期医療・助産ケアに関わる知識・技術の修得・向上だけでなく、助産師同士の交流を深め、助産師としてのモチベーション維持につながる研修を望んでおり、積極的に自己研鑽の機会を得ることや先輩助産師から学ぶ重要性を認識していた。その一

方で、「報告・連絡・相談とコミュニケーション能力の強化」、「焦り・自信のなさ・消極性の克服」などを自分自身の課題だととらえていた。そのため、2年目以降になっても、助産師としてのモチベーションを維持しながら、主体的・積極的に学び続けることができるよう助産師としての成長を支える機会の提供が必要と考える。自らの課題の明確化と新たな目標設定ができること、所属施設を越えた助産師同士の交流によるつながりを強化し、切磋琢磨できる仲間としての関係性を醸成していくことが課題である。今後、1年間というスパンではなく複数年をかけた研修内容、方略を工夫していくなど大学独自の卒後教育が求められる。



研修1日目「母乳育児への支援の実際」



研修2日目「周産期母子ケアにおける連携」



研修3日目「ケースシナリオを用いた
グループディスカッション」



研修4日目「事例に基づく助産師の
判断と看護実践」

2. 周産期における母子・家族支援のための 臨床助産師の看護実践能力育成

担当者： 永見桂子、大平肇子、岩田朋美、松本亜希、堂本万起、市川陽子

【事業要旨】

三重県では、周産期医療の現場において慢性的な助産師不足、地域特性に基づく助産師の偏在などの課題を抱えており、助産師の県内定着・継続就業支援に向けた取り組みがなされてきた。また、平成 27 年 8 月より、日本助産評価機構による「助産実践能力習熟段階（クリニカルラダー）レベルⅢ」の認証評価制度が開始され、助産師の資質向上も課題となっている。妊産婦の多様なニーズに応え、質の高い助産ケアを提供し、さらに関係職種と連携・協働するためには、助産師の学習ニーズや成長過程に応じた研修体制を整備し、助産実践能力獲得を支援することが必要である。

本事業は、三重県内で就業する中堅層以上の助産師を対象とした卒後教育プログラムを提供することにより、助産師の自律、実践能力向上に資することを目的とする。

【地域貢献のポイント】

三重県内で就業する中堅層以上の助産師の学習ニーズに応え、継続的な卒後教育プログラムの提供をとおして臨床実践能力や助産師育成能力の獲得を支援することにより、助産師のキャリアディベロップメントに資する。

三重県内で就業する中堅層以上の助産師の臨床実践能力や助産師育成能力の獲得を支援することにより、地域住民に提供される看護の質向上に寄与する。

I. 活動計画

三重県より「平成 30 年度助産師（中堅者）研修事業」を受託し、中堅層（助産師経験年数概ね 5 年以上）の助産師を対象とした研修を実施する。平成 24～28 年度までの 5 年間、中堅者研修（助産師経験 5～15 年の助産師対象）および指導者研修（助産師経験 15 年以上の指導的立場にある助産師対象）の 2 コース各 3 日間の研修であったが、昨年度より中堅層以上の助産師を対象とした中堅者研修 1 コースにみに絞られた。今年度は昨年度の研修内容・運営方法等の評価に基づき、「助産師としての役割拡大をめざして～得意分野を広げよう～」をテーマに、女性のメンタルヘルスケア、周産期のクリティカルケア、乳児期の母乳育児支援、地域における子育て世代包括支援の実践に関する研修を企画し、中堅層以上の助産師の自律、実践能力向上に資することを目標とした。

重点課題および数値目標は以下の 4 点とする。

1. 三重県内で就業する助産師のニーズ調査結果を平成 30 年度卒後教育プログラムに

反映できる。

2. 継続的な卒後教育プログラムの提供に向けて三重県内医療施設の産婦人科医、小児科医、助産師等関連専門職者との連携を強化できる。
3. 研修参加者や就業施設の臨床実践能力や助産師育成能力の向上につなげることができるとの回答が得られる。
4. 研修参加者（実人数）30名程度、かつ各日とも80%以上の出席率を確保できる。

Ⅱ. 活動の結果と評価

1. 研修プログラムについて

10月14日（日）、11月4日（日）、12月9日（日）の3日間（10：00～15：30）の研修プログラムを策定した。研修初日には、分娩中や産後の過剰出血に引き続く産科危機的出血など「産婦人科診療ガイドラインに基づく緊急時の対応」への理解を深め、チーム医療の視点から Team STEPPS の方略について実践的に学ぶ。母乳外来受診事例をもとに「乳児期の母乳育児支援」について理解を深め、助産師が母乳育児継続支援に関わる意義について考察する機会とした。2日目には、県内での講習会開催機会が少なく助産師の学習ニーズの高い「新生児蘇生法（Aコース）」を実施し、助産実践能力習熟段階（クリニカルラダー）レベルⅢの認証申請に活用する機会を提供した。3日目には、「女性のメンタルヘルスケア」について、精神疾患事例をもとにその特徴と支援について学び、メンタルヘルスにおける対象理解の視点を強化する機会とした。また、「地域における子育て世代包括支援」をテーマに3名のパネラー（産婦人科医、助産師、保健師）を招聘しパネルディスカッションを行い、助産実践への示唆を得る機会とした。

2. 研修参加者の受講状況について

8月に県内医療施設109施設（病院22施設、診療所51施設、助産所36施設）に開催案内を送付し、参加者を募集した。応募者は1日目17名、2日目13名（18名までを定員とした）、3日目16名であり、のべ応募者数は46名であった。応募者（実人数）29名の研修申込み日数の内訳は1日のみ15名、2日間11名、3日間3名であった。研修各日の出席者数と出席率（出席者／応募者）は、1日目15名（88.2%）、2日目13名（100%）、3日目14名（87.5%）であり、数値目標の研修参加者（実人数）30名程度、かつ各日とも80%以上の出席率を確保することができた。研修参加者29名の就業場所は病院19名（うち周産期母子医療センター6名）、診療所4名、助産所5名、教育機関1名であった。

なお、本学助産師課程選択生（4年生）が1日目に2名、3日目に1名ボランティアとして参加した。また、3日目には本学大学院修了生1名が研修協力者として参加した。

3. 助産師（中堅者）研修に関する評価について

研修参加者のべ42名のうち、研修各日終了時のアンケートへの回答者はのべ39名、回答率92.9%であり、1日目15名（100%）、2日目12名（92.3%）、3日目12名（85.7%）であった。本研修が自身または就業施設の助産実践能力の向上につながるかとの問いに、1日目には大変そう思う9名（64.3%）、まあまあそう思う5名（35.7%）

であり、その理由として、「チーム医療の内容を考えるよいきっかけとなった」、「母乳育児支援がとても参考になった」などが挙げられた。2日目には大変そう思う9名(75.0%)、まあまあそう思う3名(25.0%)であり、「新生児蘇生法のシミュレーションを病院での訓練に導入していく」、「今後を見据えた新生児蘇生法の知識と技術を得られた」などが挙げられた。3日目には大変そう思う5名(41.7%)、まあまあそう思う7名(58.3%)であり、「自分の仕事と直結しており知識を使っていけそう」、「市民の満足につながるしくみを作っていけるとよい」などが挙げられた。

研修内容が期待通りであったかについては、1日目には期待通り11名(73.3%)、まあまあ期待通り4名(26.7%)であり、その理由は「期待以上の内容でとても楽しかった」、「Team STEPPS の話を聴けてよかった」、「チームケアの重要性を学んだ」などであった。2日目は期待通り10名(100%)であり、「実際のシミュレーションが学びとなった」、3日目には期待通り7名(58.3%)、まあまあ期待通り5名(41.7%)であり、「精神疾患患者へのかかわり方のコツがよく分かった」、「包括支援の大切さがあらためてわかった」などの理由が挙げられた。研修会運営については、1日目にはよい14名(100%)であり、「講義時間が長すぎず辛い」、「ボランティアがいて配慮があった」といった理由が挙げられた。2日目にはよい11名(91.7%)、まあまあよい1名(8.3%)であり、3日目にはよい6名(50.0%)、まあまあよい6名(50.0%)であった。3日目は「パネルディスカッションの時間があるともっと深められた」といった意見があった。

研修をとおして得られた今後の課題として、1日目には「チーム医療における医師との連携」、「緊急対応時のチェックリスト作成」、「同じベクトルで考えを持つことや他の意見を聴くこと」、2日目には「予測して行動していくこと」、「蘇生法の訓練」、「経験の蓄積」、3日目には「関連機関との連携、切れ目ない包括ケアの強化」、「妊婦の背景をもっとみる」などが挙げられた。今後開催を希望する研修内容として、「ALSOやJ-CIMELS、PCキューブ」、「特定妊婦への関わり」、「乳幼児の発達評価」、「体調管理のための食事指導」、「産後うつとエンジンバラ尺度の活用」などが挙げられた。

Ⅲ. 今後の課題

今年度は、「助産師としての役割拡大をめざして～得意分野を広げよう～」をテーマに、女性のメンタルヘルスケア、地域における子育て世代包括支援の実際に関する研修内容などを組み込んだ。特に地域における子育て世代包括支援についてはパネルディスカッションを企画し、助産師がもつべき視点や技術、果たすべき役割について考え、支援者としての真の連携・協働関係を築いていくうえでの課題を明らかにすることを試みた。妊娠期から子育て期にわたる切れ目のない支援の必要性が高まるなか、助産師にはマタニティケア能力のみならず、多職種連携・協働、ウィメンズヘルスケア能力のさらなる獲得が求められる。今後も社会情勢をみすえ、目玉となる研修テーマを掲げ助産師にとって魅力ある研修としていく。助産師である大学教員が企画・運営する研修である強みを活かし、大学だからこそ提供できる独自性のある卒後研修プログラムとしていくことが課題である。



研修1日目「産婦人科診療ガイドラインに基づく
緊急時の対応」



研修2日目「新生児蘇生法（Aコース）」



研修3日目「地域における子育て世代包括支援」

3. 認知症対応力向上研修

担当者：地域交流センター委員

【事業要旨】

本事業は、三重県の委託をうけ、病院勤務の医療従事者及び指導的立場の看護職員の認知症対応力向上のため、以下の研修を実施するものである。

1. 病院勤務の医療従事者向け認知症対応力向上研修（半日研修）

三重県内の病院に勤務する医療従事者（医師、看護師等）に対し、認知症の人や家族を支えるために必要な基本知識や、医療と介護の連携の重要性、認知症ケアの原則等の知識について習得するための研修を実施することにより、病院での認知症の人の手術や処置等の適切な実施の確保を図ることを目的とする。

2. 看護職員認知症対応力向上研修（3日間研修）

三重県内の指導的立場の看護師に対し、医療機関等に入院から退院までのプロセスに沿った必要な基本知識や、個々の認知症の特徴等に対する実践的な対応力を習得し、同じ医療機関等の看護職員に対し伝達することで、医療機関内等での認知症ケアの適切な実施とマネジメント体制の構築を目的とする。

【地域貢献のポイント】

- 医療施設等の現場で認知症ケアに携わる医療従事者の質の向上に貢献する。
- 研修で培った専門的な知識や実践的対応力を共に働く看護職や他の職種の人に指導できる人材の育成に貢献する。

I. 活動計画

厚生労働省老健局長通知「認知症地域医療支援事業の実施について」の標準的なカリキュラムに基づき、研修を実施する。

1. 病院勤務の医療従事者向け認知症対応力向上研修（半日研修）

開催回数：1回以上

対象者：三重県内の病院で勤務する医師、看護師等の医療従事者

定員：1回あたり100名程度

会場：平成29年度は、遠方からの参加が少なかったため、地域の医療施設へ協力を仰ぎ、会場を検討する。

2. 看護職員認知症対応力向上研修（3日間研修）

開催回数：1回以上

対象者：三重県内の医療施設で勤務する指導的立場の看護職員で、3日間の研修に全て参加し、研修受講後に自施設での研修を実施し実施報告書を提出する事ができる者

定員：1回あたり100名程度

会場：三重県立看護大学

Ⅱ．活動の結果と評価

半日研修、3日間研修ともに、県内の約 200 施設（医療施設等）へ開催案内を送付し、受講者を募集した。申し込みを受けた順に受講者を決定し、受講決定通知書を送付した。また、研修修了者には、三重県知事より修了証書が交付された。

1．病院勤務の医療従事者向け認知症対応力向上研修（半日研修）

1）研修開催日

第1回：平成30年11月6日（火）

第2回：平成30年12月14日（金）

2）会場

第1回：社会医療法人畿内会岡波総合病院（伊賀市）

第2回：三重県立看護大学（津市）

3）受講者数

第1回：82名、第2回：29名

4）アンケート結果

受講者アンケートによると、受講者の職種は、看護師が最も多く 48.1%であった。他に、ケースワーカー、薬剤師、作業療法士での参加があった。受講理由は、勧められたが最も多く、次いで認知症に興味がある、自己研鑽であった。

研修の全体評価では、とてもよかった（第1回 56.4%、第2回 28.6%）、よかった（第1回 41.0%、第2回 64.3%）を合わせて9割以上の回答であった。

2．看護職員認知症対応力向上研修（3日間研修）

1）研修開催日

第1回：平成30年9月6日（木）、11日（火）、12日（水）

第2回：平成30年11月1日（木）、2日（金）、3日（土）

2）会場

三重県立看護大学（津市）

3）受講者数

第1回：22名、第2回：32名

4）アンケート結果

受講者は、三重県内の28医療施設から参加であった。受講者アンケートによると受講理由は、勧められたが最も多く、次いで自己研鑽、認知症に興味があるであった。

研修の全体評価では、とてもよかった（第1回 68%、第2回 69%）、よかった（第1回 32%、第2回 25%）を合わせて9割以上の回答であった。

Ⅲ．今後の課題

中勢（津市）での開催は、遠方からの参加者が少ないため、地域の医療施設へ協力を仰ぎ、北勢、伊賀、南勢、東紀州等での開催を検討することとする。

IV. 認定看護師教育課程「認知症看護」

認定看護師教育課程「認知症看護」

担当者：地域交流センター

【事業要旨】

本教育課程は、看護の質向上及び看護職者のキャリア支援に向けた教育を行うことを目的とし、認知症看護分野において、実践の基盤となる科学的思考と熟練した看護技術を用い、看護師としての倫理観に基づいた役割機能を発揮できる人材を育成する。

【地域貢献のポイント】

認知症者とその家族の支援に関する最新の知識と技術を習得し、水準の高い看護実践を、共に働く看護職や他職種と協働して提供できる人材を育成することにより、医療施設等における認知症看護の質的向上に貢献する。

I．平成 30 年度の活動の実際

- 1．教育期間：5 月 11 日～2 月 28 日
- 2．授業時間：90 分を 1 時限とし、原則 1 日 5 時限
- 3．授業科目：

区分	科目	時間数（単位）
共通科目	医療安全学：医療倫理	16（1）
	医療安全学：医療安全管理	16（1）
	医療安全学：看護管理	16（1）
	臨床薬理学：薬理作用	16（1）
	チーム医療論（特定行為実践）	16（1）
	相談（特定行為実践）	16（1）
	指導	16（1）
	医療情報論	16（1）
	〔小計〕	〔128（8）〕
専門科目	認知症看護原論	16（1）
	認知症基礎病態論	16（1）
	認知症病態論（認知症の原因疾患と治療）	46（3）
	認知症に関わる保健・医療・福祉制度	16（1）
	認知症看護倫理	16（1）
	認知症者とのコミュニケーション	16（1）
	認知症看護援助方法論Ⅰ（アセスメントとケア）	46（3）
	認知症看護援助方法論Ⅱ（生活・療養・環境づくり）	30（2）
		30（2）
	認知症看護援助方法論Ⅲ（ケアマネジメント）	16（1）
	認知症者の家族への支援・家族関係調整	〔248（16）〕
	〔小計〕	
演習 および 臨地実習	学内演習	90（3）
	臨地実習	180（4）
	〔小計〕	〔270（7）〕
合計		646 時間 〔31 単位〕

4. 研修生の概要

- 1) 研修生：男性 6 名（20％）・女性 24 名（80％）計 30 名、平均年齢 39.9 歳
- 2) 所属施設：病院 27 名（90％）・その他（福祉施設等）3 名（10％）
- 3) 所属施設所在地：県内 17 名（56.7％）・県外 13 名（43.3％）



Ⅱ. 活動の結果と評価

平成 29 年に引き続き、平成 30 年度の研修生 30 名全員が本教育課程を修了したことは大きな成果であったと考える。

また、平成 29 年度修了生は平成 30 年度日本看護協会認定審査に全員合格したため、本教育課程より 30 名の認知症看護認定看護師を育成することができた。合格者のうち 17 名は三重県内の施設に所属する修了生であり、今年度は三重県との共催により修了生に対するフォローアップ研修会も実施したため、三重県の医療及び福祉施設における認知症看護の質的向上に寄与することができたと思われる。

Ⅲ. 今後の課題

研修生の負担を考慮し、学修環境や実習環境を整えることによって、より充実した教育体制のもとで研修生の実践力を高めることができるよう、事業を継続し実施していきたい。

また、修了生が本教育課程に期待する研修内容等を把握し、修了生にとって効果的なフォローアップ研修を今後も実施できるよう検討することが課題である。

V． 地域交流センター企画事業

1． 講師派遣

1) 出前講座

担当者：出前講座テーマ登録教員、地域交流センター

【事業要旨】

教員が、自身の教育、研究、社会活動の専門性や成果をもとに、保健・医療・福祉の専門家および県民を対象としたテーマを提案し、依頼に応じ、その講座を出張して行う。

【地域貢献のポイント】

- ・本学教員の研究や社会的活動の成果として看護・医療・健康に対する知識を、県民に還元するとともに、県民の看護・医療・健康への関心や意識を高める。
- ・看護職向けの講座を提供し、県内の看護の質向上に貢献する。

I. 活動計画

＜数値目標＞

- ・過去3年間における出前講座の平均実施件数（66件）を維持する。

＜実施計画＞

1. 平成30年3月～4月に、全教員より出前講座のテーマを募集する。
2. 4月中に、出前講座の案内パンフレットを作成、県内各所に送付するとともに、本学ホームページに掲載する。
3. 申込受付は、平成30年11月30日とする。
4. 申込があった際には、随時、担当教員と日程調整を行い、講師を派遣する。
5. 派遣は、平成31年3月末日までとする。
6. 決定した出前講座が、広く県民が参加できる公開の講座として依頼者から了解を得た場合には、依頼者側と本学との共催による公開講座として実施する。

II. 活動の結果と評価

＜結果＞

1. 昨年度からの変更点
「一人の教員あたりの実施件数上限：3件」であったところ、教員と県民から双方の希望を踏まえ、「一人の教員あたりの実施件数上限：5件まで」と増加させた。
2. 今年度の出前講座は、43テーマが登録され（表1）、平成30年5月から受付を開始した。
3. 申し込み件数は、86件であったがそのうち8件は日程等調整ができず、実施しなかった。
4. 出前講座43テーマのうち、33テーマに依頼があり、30テーマは申込期限前に、定員となり受付を終了した。また、教員一人あたりの上限件数に達したため受付を終了したテーマもあった。

5. 実施件数は 78 件であり、そのうち依頼者側と本学共催の公開講座として 4 件実施した（表 2）。満足～だいたい満足の割合は、平均 97%と高かった。
6. 依頼者は、「A 健やかな暮らしのために」は医療機関・社会福祉機関・教育機関、「B 将来の職業選択のために」は教育機関、「C 高めよう保健・看護の力」は医療機関・社会福祉機関が多かった。昨年と同様の依頼者が複数あり、また昨年までは依頼がなかった民間企業や保育施設からも依頼があった。
7. 本学ホームページに、随時受付終了となったテーマについて掲載し、情報の刷新を速やかに行った。また、今年度より新たに、出前講座の実施報告記事を 4 件掲載した。このため掲載後、講座内容について問い合わせもあった。

<評価>

今年度の実施件数が数値目標（過去 3 年間の出前講座平均実施件数 66 件）を上回るとともに、また出前講座の 43 テーマ中約 77%に依頼があり、出前講座の満足度も高かった。以上より、本学教員の看護・医療・健康に対する知識を、県民に還元し、県民の看護・医療・健康への関心や意識を高めることができたと評価する。一人の教員あたりの実施件数を、3 件から 5 件に増やしたことや、ホームページへの記事掲載も効果があった。

依頼者は「A 健やかな暮らしのために」、「C 高めよう保健・看護の力」とも医療機関が最も多く、県内にて看護職向け講座を提供し、看護の質向上に貢献できたと考える。

Ⅲ. 今後の課題

出前講座は、医療機関、行政機関、社会福祉施設、教育機関、民間企業、NPO 法人など様々な団体から申し込みがあり、実施件数も多いことより、要望が高い。今年度は、30 テーマで申込締切期限前に教員の実施可能件数を上回ったため、受付を終了せざるを得なかった。

今後も教員の学内業務が優先できる環境（休日や夜間等の依頼は受け付けない等）を保ちつつ、地域のニーズに応えるために、申し込みが集中するテーマは、依頼者側と本学共催の公開講座とし、教員個人に過度に負担がかからないよう留意しつつ、受入れ人数を増やすことができるよう調整していきたい。

一方、現在は教員一人当たりを基準に受付上限を設定しているため、開催することが出来ないまま受付中止となったテーマがあった。そのため、次年度以降は、各テーマごとに受付上限を決定するように変更とする。

表1. 平成30年度 出前講座テーマ一覧

A 健やかな暮らしのために

No.	テーマ	対象者	概要
A-1	タッピングタッチでこころと体をリフレッシュ	幼児～高齢者	家族、友人、同僚同士、お互いのケアの方法としてタッピングタッチを行い、心と体をリラックス、リフレッシュさせ、ストレスを減らしたり、関係性をよくするために行います。
A-2	呼吸法と瞑想で心と身体をすこやかに！	一般	ヨガの呼吸法と瞑想は、心身をリラックスさせ、イライラやストレスを減らすことができます。実際に呼吸法と瞑想を練習します。
A-3	思春期男子のこころとからだを理解しよう	主に中学生や高校生の男子に関わる方 (中学生・高校生対象も対応可能です)	思春期は「こころ」も「からだ」も大きく変化する時期です。しかし、男子は女子ほどその変化に注目されていなかったり、性教育の十分さも指摘されたりしています。思春期男子の特徴を知り、皆さんでよりよい関わり方を考えていきましょう。
A-4	こどもの自殺・自傷行為の理解と予防	教員 保護者	思春期はこころとからだの成長に伴い、こころのバランスが崩れやすい時期です。近年、若者の自殺やリストカットなどの自傷行為は大きな問題となっています。悩む子どもたちに対して、命の大切さを説明することや道徳だけで教えることはできません。子どもたちをどのように理解して支えるのか、自殺予防の教育について考えます。
A-5	子どもの自己肯定感を育てる関わり方	保護者、 教職員 一般	子ども達の自己肯定感について実際の子どもの様子やデータから分かりやすく解説します。子ども達のやる気を育てる関わり方を一緒に考えていきましょう。
A-6	地域で支えよう！子どもの成長発達と毎日の生活習慣	保護者、 教職員 一般	夜更かしすると幸せホルモンが減ってしまう？ 子どもの成長発達に大きく影響する生活習慣を具体的に解説します。地域での子育て支援、基本的な生活習慣では「睡眠と食事の関係」など希望テーマにも対応します。
A-7	知っておきたい！「女性のこころとからだ」	一般女性	ライフステージによって女性は各時期特有の心身の変化に向き合うことになります。健康管理・QOL向上の視点からセルフケアについて学びましょう。
A-8	更年期以降をいきいきと過ごすために	更年期以降の一般女性	更年期以降の女性が加齢とともに悩まされがちな症状の原因や背景について学び、日常生活での予防や対処方法について考えてみましょう。
A-9	女性の性と生—更年期女性の健康—	中高年の女性	中高年女性の健康保持・増進を目的に、更年期の気になる症状や悩みを緩和する健康法をお伝えします。
A-10	楽しく・おいしく減塩しましょう！	一般	健康増進、生活習慣病予防のためにも減塩は重要です。そこで、地域にお住まいのみなさんに無理なく簡単に減塩できる秘策をお教えます。
A-11	薬に関する四方山話	一般	近年、薬局でも様々な薬を容易に入手ができるが、その使用に際しての知識は十分とは言えない。本講座では、風邪薬等の一般的によく使われる薬の正しい使い方等について解説する。
A-12	血栓症の発症原因とその治療薬	一般	近年、医療の高度化に伴い、深部静脈血栓症の患者数が激増している。本講座では、種々の血栓性疾患について、個々の発症原因と共に、それぞれの治療薬や日常的予防法を分かりやすく解説する。
A-13	知って防ごう熱中症	中学生～ 一般 看護職	気温や湿度が高いと、熱中症になるリスクが高まります。暑い夏を健康に過ごせるよう、その原因や予防法を分かりやすく説明します。
A-14	サルコペニアって何？	一般、 看護職	加齢によって筋肉が減っていくサルコペニアについて分かりやすく解説します。
A-15	日常生活の中で運動を！	医療福祉関係者、 一般	簡単な用具を使って日常生活の中でできるエクササイズ(有酸素運動・筋力トレーニング)の方法を知りましょう。
A-16	“楽しく・正しく・安全に”体力評価！	一般	健康チェックとして役立つ新体力テスト(60歳以上)を、安全・正確に行う方法を知りましょう(地域・サークル等のリーダー向き)。
A-17	心肺蘇生法をマスターしよう！	一般	心肺蘇生法は、いざという時に実践できれば助かる命を救うことはできません。簡易的な一時救命処置(心臓マッサージおよびAEDの取り扱い)について、実際に体験していただきます。
A-18	救急車の適切な利用について知ろう！	一般	救急要請をする際に、確認すべき症状について理解し、救急要請が必要か否かを判断できるようになっていただきます。
A-19	知ってるようで知らない感染看護	医療施設・保健福祉 関係機関の職員 一般	最新の感染症の話題をまじえて、感染対策について楽しくやわらかくお話し致します。お気軽にご依頼ください。リピーターも大歓迎です。
A-20	医療事故はなぜ起きる？—ヒューマンエラーを防ぐための人間工学—	一般 学生 看護職 医療職	エラーを起こさない人はいません。忘れ物から交通事故、さらには原子力発電所などの人為的事故はなぜ起こるのか？人間とシステムの特性、そして両者の関わり合いから詳しく説明をします。本講座では、さまざまな分野におけるヒューマンエラーについて説明を行うとともに、その人間工学的な対策について解説を行います。希望によっては医療分野におけるヒューマンエラーとその分析手法についても解説をします。
A-21	スマホやパソコンによる疲労を防ごう！ 快適な職場を目指すコンピューター労働の人間工学	一般 看護職	メールやインターネットが当たり前の時代になりましたが、人は大昔から変わっていません。「読み」、「書き」、「そろばん」がパーソナルコンピュータに変わり、私たちの労働は便利になりました。しかし、パーソナルコンピュータの普及は人の視覚系や筋骨格系への負担を増加させるばかりか、メンタルストレスなど多くの課題を残しています。本講座では、負担の少ない快適なコンピュータ労働の環境を構築するため、産業保健人間工学の立場から解説を行う予定です。
A-22	社会的活動としての話すこと・聴くこと	高校生 一般	日頃当たり前のように行っている話すことや聴くことですが、これらはじつはとても精密なやり方にもとづいて作り上げられています。この授業では、具体的な事例を検討しながらこの点を確認していきましょう。
A-23	表現の自由とリミット	高校生以上	ボルノやヘイトスピーチも表現なのだから、その自由は保障されるべきなのか？各国の表現規制の現状やその根拠や妥当性について、倫理学のアプローチから考察する

A 健やかな暮らしのために

No.	テーマ	対象者	概要
A-24	組織におけるリーダーシップについて考える	一般	この授業では、組織のなかで働くことや、組織を運営することの難しさについて、社会学のアイデアを使いながら一緒に考えてみたいと思います。
A-25	キッズ英会話	幼児	歌や絵本を通して英語に触れてもらいたいと思っています。小さい頃から英語の音声に慣れていくことを目標としています。

B 将来の職業選択のために

No.	テーマ	対象者	概要
B-1	看護職(保健師、助産師)のお仕事を知ろう	中・高校生	保健師、助産師のお仕事をご存じですか？看護師との違いを具体的にお伝えします。職業選択の幅を広げてください。
B-2	看護の仕事について	小・中学生	将来の職業選択の一助となるように、小中学生を対象に、一般病院に勤務する看護師の仕事を中心にお話します。
B-3	大学で学ぶこと	高校生	誰でも選べなければ大学に入学できる状況の今日、改めて大学で学ぶことの意義について考えます。
B-4	看護大学で学ぶ「看護技術」の授業	高校生	看護職になるために必要な学習内容を知るために、看護大学で実際に行われている「看護技術」の授業の一部を体験していただきます。
B-5	男性看護職者を知ろう	看護職を目指す男子中学生・高校生	看護職を目指す男子中学生・高校生の方に看護職の魅力や男性看護職の現状についてお話しします。
B-6	国際協力という仕事	高校生	グローバル社会において、「国際協力」も魅力的な仕事の一つです。開発途上国に病院を建設するJICAプロジェクトにかかわった経験を話し、主に保健医療分野での国際協力のやりがいや魅力をお伝えします。
B-7	グアテマラ共和国ってどんな国？	どなたでも	日本人には、あまり馴染みのないグアテマラ共和国。日本では「当たり前」のことが、その国では「当たり前ではない」。青年海外協力隊での経験をもとに、看護の視点を持ちながら現地の人々との生活、環境、文化を紹介します。

C 高めよう保健・看護の力

No.	テーマ	対象者	概要
C-1	患者さんの思いに寄り添えるコミュニケーションのヒント	看護職者	患者さんの本当の思いを引き出しているのかあのかかわりは良かったのかなど、疑問を感じていませんか？、自己のコミュニケーションの振り返りや、患者さんの思いに寄り添えるコミュニケーションのヒントをお伝えします。
C-2	精神症状に合わせたかかわり方のヒント	看護職者	精神症状のある患者さんのかかわりに悩んでいませんか？精神症状に関する知識のおさらいと、うつ症状や、幻覚・妄想状態にある患者さんとのかかわり方について、精神科領域で使われているスキルをお伝えします。
C-3	こころの元気を守る看護師向けセルフケア研修	看護職者	本講座では、看護師それぞれが自分で自分のストレスに対処し、心身の健康を保持増進するためのコツを認知行動療法に基づくアプローチで学びます。
C-4	精神障がいをもつ人の地域生活を支える	支援者 訪問看護	精神障がいをもちながらも、その人らしく地域で生活していくという「リカバリー」という考え方が精神看護の中では大切にされています。しかし、精神症状についての理解や対応に支援者の多くは戸惑います。事例検討や講義などによって地域で生活する精神障がいをもつ人の生活を支える支援を考えます。
C-5	職場のメンタルヘルス	医療職	感情労働といわれる医療職のメンタルヘルスについて解説します。
C-6	人工呼吸器装着中の看護について	看護師	人工呼吸器装着中の看護に関して、実践で活用したい内容などご要望に沿って行います。
C-7	一人暮らし認知症高齢者の認知症の進行に伴う生活障害への支援	在宅の高齢者支援を担う専門職	生活実態が捉えにくい一人暮らし認知症高齢者の生活の不自由の過程と彼らの心の状況について解説する。
C-8	困難事例のアセスメント	地域包括支援センター等の専門職	いわゆる困難事例について(模擬事例等)について家族システム論を用いアセスメントする方法について解説する。
C-9	“対象者に優しい”持ち上げない移乗介助！	医療 福祉関係者 一般	対象に優しく介助者の腰痛も予防しながら行う移乗介助技術(用具を用いて行う方法)を知りましょう。
C-10	あらためて学ぶ、フィジカルアセスメントの基礎！	看護職	胸部、腹部、筋骨格系のフィジカルアセスメントについて基本技術から学び直してみよう(1回の講義につき、1項目のみ)。
C-11	ケアとバタナリズム	医療職	医療におけるバタナリズムは悪であるというのは本当は？悪であるとして、いかなる意味で悪なのか？一切のバタナリズムを排して医療はそもそも可能なのか？常識を吟味する倫理学のアプローチから検証する。

表2. 平成30年度 出前講座の実績

領域	No	テーマ	開催日	依頼者	参加人数
A 健やかな暮らしのために	1	タッピングタッチでこころと体をリフレッシュ	10月16日	松阪市立朝見小学校	31
	2	呼吸法と瞑想で心と身体をすこやかに！	8月31日	鈴亀地区 女性校長教頭会	20
			9月6日	若松公民館運営委員会	22
			9月7日	玉城町社会福祉協議会	39
			9月20日	津傾聴ボランティア会	8
			11月23日	三重県身体障害者総合福祉センター	25
	3	思春期男子のこころとからだを理解しよう	12月7日	三重県立特別支援学校玉城わかば学園	47
			12月13日	三重県立杉の子特別支援学校石薬師分校	37
	4	子どもの自殺・自傷行為の理解と予防	7月30日	北勢地区高等学校養護教諭の会	20
			7月30日	菰野町学校保健委員会	9
			12月7日	輪中地区養護教諭委員会	7
	5	子どもの自己肯定感を育てる関わり方	10月22日	明和町ファミリーサポートセンター	10
	6	地域で支えよう！子どもの成長発達と毎日の生活習慣	6月4日	名張市福祉子ども部 健康・子育て支援室	65
			11月23日	朝日町木曾岬町ファミリーサポートセンター	13
	7	知っておきたい！「女性のこころとからだ」	7月13日	明和町役場 職員労働組合女性部	46
			11月23日	一般財団法人 近畿健康管理センター 三重事業部(●)	20
			12月13日	三重県立杉の子特別支援学校石薬師分校	25
			1月22日	マーチの会	6
	10	楽しく・おいしく減塩しましょう！	9月21日	内部地区婦人会(小古曾町公民館)	35
			9月26日	多気町 健康福祉課	36
			3月15日	うらら(介護予防総合事務所)(●)	50
	11	薬の関する四方山話	8月7日	名古屋税友会 三重県支部	34
			10月12日	八郷西社会福祉協議会(あかつき台集会所)	35
			10月12日	八郷社会福祉協議会(八郷地区市民センター)	45
	12	血栓症の発症原因とその治療薬	12月14日	うらら(介護予防総合事務所)(●)	43
	13	知って防ごう熱中症	6月26日	中勢森林組合	44
			6月28日	津市橋北公民館	38
			7月 3日	社会福祉法人救護施設 菰野陽気園	33
			7月13日	三重県立水産高等学校	220
	14	サルコペニアって何？	7月27日	老人クラブ サン・和みの会(●)	39
	15	日常生活の中で運動を！	6月26日	津市倭公民館	20
			8月3日	東員町役場 健康づくり課	23
	17	心肺蘇生法をマスターしよう！	7月25日	医療法人 思源会 第二岩崎病院	70
			10月12日	(株)ロンビック	32
			1月10日	彰見寺	20
			1月24日	ヨナハ総合病院	26
	18	救急車の適切な利用について知ろう！	6月15日	株式会社 イレクト伊勢	20
	19	知っているようで知らない感染看護	9月6日	医療法人 思源会 第二岩崎病院	27
			1月22日	みえ医療福祉士協 四日市地域	41

領域	No	テーマ	開催日	依頼者	参加人数
A 健やかな暮らしのために	19	知っているようで知らない感染看護	3月13日	医療法人 大和会 日下病院	100
			9月20日	社会福祉法人特別養護老人ホームアパティア長島苑	26
			10月12日	社会福祉法人むつみ福祉会	24
	20	医療事故はなぜ起きる？ ーヒューマンエラーを防ぐための人間工学ー	10月18日	医療法人 普照会 もりえい病院	123
			10月31日	医療法人 大和会 日下病院	18
			2月7日	医療法人 誠仁会 塩川病院	95
			2月26日	みえ医療福祉生協 四日市地域	26
	21	スマホやパソコンによる疲労を防ごう！	11月15日	度会郡公立小中学校事務研究会	18
	22	社会的活動としての話すこと・聴くこと	8月8日	社会福祉法人老人短期入所 栗真みかんの里	23
			10月18日	社会福祉法人三重ベタニヤ	18
			3月1日	南伊勢町地域包括支援センター	25
	25	キッズ英会話	8月3日	保育ルーム ぽっぽのおうち	21
			8月8日		30
B 将来の職業選択のために	2	看護の仕事について	8月21日	社会福祉法人 日の本福祉会	44
			11月19日	鈴鹿市立平田野中学校	140
	3	大学で学ぶこと	10月17日	三重県立四日市南高等学校	26
			10月18日	津東高校	48 35
	4	看護大学で学ぶ「看護技術」の授業	11月14日	三重県立神戸高等学校	33
	7	グアテマラ共和国ってどんな国？	8月21日	いが若者サポートステーション	6
			1月29日	伊賀市立島ヶ原中学校	19
C 高めよう 保健・看護の力	1	患者さんの思いに寄り添える コミュニケーションのヒント	10月10日	社会福祉法人 老人短期入所 栗真みかんの里	21
			10月19日	医療法人主体会 小山田記念温泉病院	52
	2	精神症状に合わせたかかわり方のヒント	9月18日	三重県女性相談所	10
			9月21日	三重県桑名保健所	12
			10月22日	医療法人 桜木記念病院	42
	3	こころの元気を守る 看護師向けセルフケア研修	11月6日	松阪中央総合病院	58
			1月24日	医療法人 普照会 もりえい病院	54
	4	精神障がいをもつ人の地域生活を支える	9月3日	伊勢市社会福祉協議会	41
			2月7日	三重県紀北福祉事務所	11
	5	職場のメンタルヘルス	8月8日	医療法人全心会 伊勢慶友病院	76
			8月14日	地域総合ケアセンター シルバーケア豊寿園 (社会福祉法人 洗心福祉会)	127
			12月13日	社会福祉法人三重ベタニヤ	16
	7	一人暮らし認知症高齢者の 認知症の進行に伴う生活障害への支援	7月19日	津中部南地域包括支援センター	29
	8	困難事例のアセスメント	8月28日	津中部北地域包括支援センター	23
			11月15日	津中部中地域包括支援センター	31
	9	“対象者に優しい”持ち上げない移乗介助！	9月7日	社会福祉法人憩 特別養護老人ホーム いこい	18
			10月24日	医療法人 全心会 伊勢慶友病院	35
			11月19日	医療法人 鳳林会 榊原白鳳病院 さくら苑	38
	11	ケアとパターンリズム	2月19日	医療法人 桜木記念病院	21

78件

●は大学共催の公開講座、斜め数字は参加予定数

2) その他の講師派遣

担当者：全教員、地域交流センター

【事業要旨】

地域交流センターで、今年度出前講座にあげられたテーマに該当しない講師派遣の依頼について、有料で対応する。

【地域貢献のポイント】

- ・地域交流センターにおける出前講座に該当しないテーマに対し、「その他の講師派遣」にて依頼に応じることで、広く県民の要望に応えることができる。
- ・看護職向けの講座の依頼に応じ、県内の看護の質向上に貢献する。

I. 活動計画

出前講座のテーマに該当しない内容の依頼に対し、受付後、該当する教員に照会する。依頼者、教員双方の条件が合致した際には、実施に向けて調整を進め、講座を実施する。申込受付は、平成 30 年 11 月 30 日までとする。

II. 活動の結果と評価

＜結果＞（表 1 参照）

1. 昨年度からの変更点

申込時、希望テーマと教員名の記載を要請した。

2. 申込み件数は 30 件、実施件数は 25 件であった。

申込みに応じられなかった 5 件は、天候や講師の体調不良、依頼者の要望する講義内容にあう講師の不在等で、調整ができなかった。

3. 依頼者は医療・行政機関が多く、ついで社会福祉法人、教育、NPO 法人であった。

4. 依頼内容は、医療機関では「倫理的行動」など《看護職員として必要な基本姿勢と態度の側面》、「呼吸療法」「フィジカルアセスメント」など《技術的側面》、「キャリアラダーの見直し」など《管理的側面》と多岐に渡った。

＜評価＞

「その他の講師派遣」の実施件数は、H28 年度 9 件、H29 年度 23 件、今年度 25 件と年々増加している。依頼者が、昨年と同じ機関も多く見られ、県民の要望に応じられたと評価する。また、医療機関からの申込みが多く、講義内容は看護職員研修に対応している講義も多く、県内の看護実践能力の向上に貢献していると考える。

III. 今後の課題

依頼される内容は、多岐にわたり様々な機関から要望がある。一方、担当教員は依頼内容に応じて準備を行っており、負担となるおそれがあるため今後も丁寧に調整を行う。

表1. 平成30年度 その他の講師派遣 実績

分類	開催日	依頼者	テーマ	参加人数	教員名
医療機関	6月4日	市立伊勢総合病院	看護職員教育のキャリアラダーの見直しと教育内容検討	7	灘波 浩子
	7月30日			6	
	10月29日			5	
	9月7日		フィジカルアセスメント研修	15	脇坂 浩
	8月20日	三重県立総合医療センター	看護師としての倫理的行動	38	中西 貴美子
	10月22日			33	
	11月30日		看護管理者としての実習への関わり方を考えよう	43	
	8月3日	岡波総合病院	形態機能学を活かした看護実践～日常生活行動のしくみと身体知識について～	40	岡根 利津
	8月9日			18	岡根 利津
	11月1日	亀山市立医療センター	倫理研修	41	中西 貴美子
	12月20日		老年看護研修	45	小松 美砂
	10月5日	榊原温泉病院	コーチングの基本的な内容	13	前川 早苗
	10月12日			14	
	7月14日	鈴鹿中央総合病院	呼吸療法に関する専門知識や技術を習得するための研修	8	岡根 利津
	12月22日			7	
	9月13日	三重県立子ども心身発達医療センター	ステップⅠを対象としたプロセスレコード研修	5	北 恵都子
	12月13日			5	
	9月11日	三重中央医療センター	看護診断研修	58	脇坂 浩
行政機関	6月4日	名張市 福祉子ども部 健康・子育て支援室	子育て支援員研修	65	宮崎 つた子
	10月22日	明和町役場	ファミサポの研修に関すること	11	
	1月24日	志摩市役所	生活習慣病予防講座内の運動実践講座	22	白石 葉子
社会福祉法人	9月26日	明和町社会福祉協議会	家族介護教室での訪問看護	37	長谷川 智之
	11月30日	度会町社会福祉協議会	認知症予防と運動に関する講義とコグニサイズ演習	12	白石 葉子
教育機関	12月11日	松阪市立鎌田中学校	性の教育講演会	44	前田 貴彦
NPO法人	11月23日	朝日町木曽岬町ファミリー・サポート・センター	子育て支援研修	13	宮崎 つた子

25件

2. 看護研究支援

1) 看護研究の基本ステップ

担当者：＜講師＞大越扶貴、大平肇子、斎藤真、玉田章、大西範和、長谷川智之、
関根由紀、別當直子（株式会社紀伊國屋書店）
＜運営＞地域交流センター

【事業要旨】

看護職者の研究基礎能力を育成するため、看護研究の基本的内容に関する講座を実施する。

【地域貢献のポイント】

三重県内の看護職者を対象とした看護研究の基礎講座を開催することにより、看護研究の基礎能力向上を目指す。受講者は、日常の看護業務の中から研究テーマを見出し、研究の基本的知識・技術を習得し、看護研究へ取組む意識を高める。

I. 活動計画

＜数値目標＞

- ・定員 40 名の受講生が得られる。

＜実施計画＞

1. 看護研究の基礎講座は、平成 28 年度以降集合研修と遠隔配信授業を毎年交互に実施する（H29 年度は遠隔配信）。
2. 平成 30 年 4 月に計画を立て、プログラムと受講案内を県内各医療福祉行政機関等（約 140 施設）へ送付するとともに、本学ホームページに掲載する。
3. 今年度は、6 月から 8 月に、集合研修の実施を行う。

II. 活動の結果と評価

1. 研修の実際

1) 研修内容

研修プログラムは、8 科目を 4 日間で実施する内容（13 時間）となり、受講料は一人 7,776 円（税込）とした（表 1）。また、今年度新たな取組みとして、受講生各自が本学の施設を自由に活用し、文献検索を行える時間を取り入れた（表 1. 網掛枠）。

2) 受講者の概要

今年度の研修コースには、19 施設から 43 名が参加した。前回の集合研修（平成 28 年度：21 施設から 55 名）より 10 名程度少なかったが、定員 40 名を超える受講者が参加したことから、基礎的な看護研究の講座へのニーズは高いと考える。8 科目をすべて受講した研修生には、修了証書を授与した。今年度は、41 名が修了した。



「看護研究の基本ステップ」講義の様子

表 1. 平成 30 年度 看護研究の基本ステップ 研修プログラム

開催日	時 間	教 室	テ ー マ	講 師
6/22 (金)	12:50～13:00	中講義室 3	あいさつ (地域交流センター長)	
	13:00～14:30		看護研究の意義と文献の活用	大越 扶貴
	14:40～16:10	第 1 情報処理	文献検索と図書館の利用	別當 直子
6/29 (金)	13:00～14:30	中講義室 3	研究計画書の立て方と書き方	大平 肇子
	14:40～16:10		質的研究	関根 由紀
7/19 (木)	13:00～14:30	中講義室 1	量的研究	長谷川智之
	14:40～16:40	第 2 情報処理	統計解析 (演習含む)	斎藤 真
8/22 (木)	10:00～12:00	第 2 情報処理	各自にて文献検索 (フリー)	地域交流センター
	13:00～14:30	中講義室 1	研究論文作成	玉田 章
	14:40～16:40	第 2 情報処理	プレゼンテーション (演習含む)	大西 範和
	16:40～17:10		修了証書授与式 (地域交流センター長) 相談コーナー (自由参加)	

2. 受講生アンケート結果

アンケート回収数 40 (回収率 93%)

1) 受講生の属性

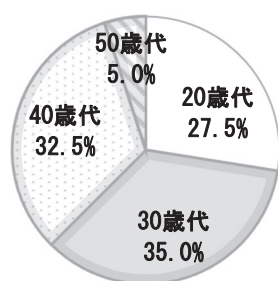


図 1. 受講生の年代

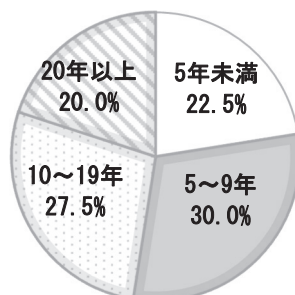


図 2. 経験年数

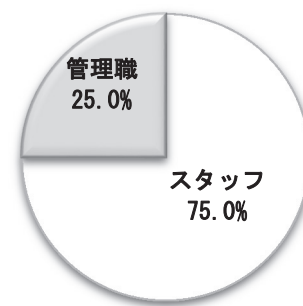


図 3. 職位

今年度の受講生は、30～40 歳代が多く、経験年齢は様々であったが、管理者よりもスタッフの受講者が多かった。

2) 受講理由について

受講理由を、図 4 に示す。

受講者は、看護研究を学びたい方、もしくは、看護研究に携わっていたり携わろうとしている方が多く、合わせて 31 名であった。

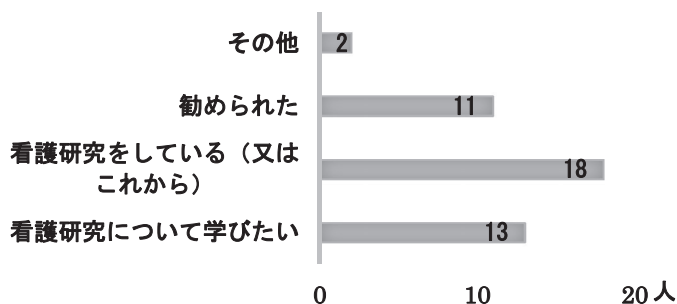


図 4. 受講理由について

3) 講義内容の理解について

各講義内容の理解について、図5に示す。昨年度は、「統計解析」、「量的研究」、「質的研究」に対する理解度が低かったが、今年度は8科目とも「良く理解できた」、「まあまあ理解できた」が8割を超えており、看護研究への理解が高まった。遠隔配信に比べ集合研修では、実際に講師との距離も近く、講義内容の理解度が深まったと考える。

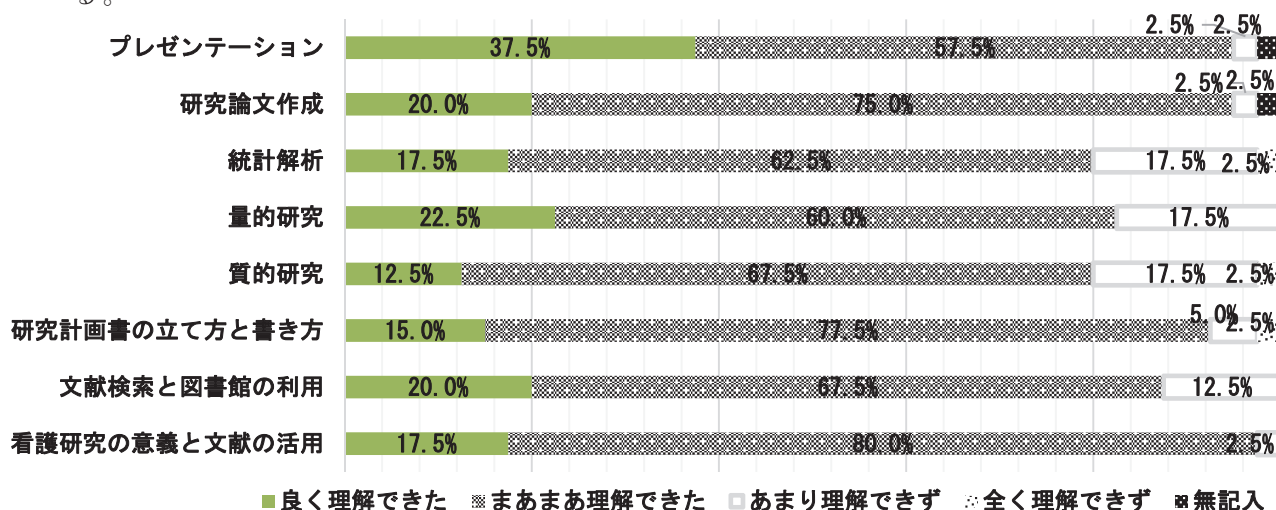


図5. 各講義の理解度

4) 本講座全般について

本講座全般に対する満足度を、図6に示す。無記入以外の全ての方が、「満足」、「やや満足」と回答しており、満足度が高かった。

本講座を受講し、看護研究をしよう（又は続けよう）と思うとの回答は、35名(88%)であった。このことから本講座を受けることにおいて、看護研究へ取り組み、実施につながるきっかけとなったと考える。また、今年度から開始した、各自にて文献検索を行った時間の参加者は9名(21%)であった。

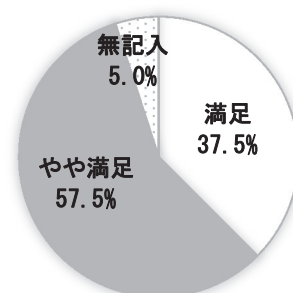


図6. 本講座全般の満足度

自由記載では、「基本ステップのため、本格的には各コースで学びを深める必要があると思った」との意見も聞かれ、実際に、本講座受講者が、引き続き具体的な手法を学ぶ「ハウツー看護研究」へ受講申込みを行う様子も見られた。開催時期などに関しては、「時間をもう少しまとめて欲しい」や、「早い時期にまとめて受講出来たら、自分の研究に活かすことができた」といった意見も聞かれた。

III. 今後の課題

「看護研究の基本ステップ」は、集合研修と遠隔配信講座を毎年交互に行っている。今年度の参加者は、定員40名を超える43名であり、今後も隔年の開催を継続していく必要がある。受講者は、実際に看護研究を実施する前に知識や手法を学びたいと考えられる。そのため、開催時期のニーズに合うように、今後検討が必要である。また、本講座における基礎的な研究の学びを発展できる方法としてハウツー看護研究の広報を丁寧に行い、看護研究支援を段階的に継続できるようにする必要がある。

2) ハウツー看護研究

担当者：＜講師＞浦野 茂、関根 由紀、斎藤 真、菅原 啓太、長谷川 智之
＜運営＞地域交流センター

【事業要旨】

看護研究の基礎講座（看護研究の基本ステップ）を修了した看護職者を対象に、研究を進めるための具体的な方法について研修を行い、研究実践能力の向上を目指す。

【地域貢献のポイント】

看護研究の基礎知識を習得した看護職者が、具体的な研究方法を学び、演習型の研修を実施することにより、看護現場での研究内容が充実し、看護の質向上につながる。

I. 活動計画

＜数値目標＞

研修は、各研究手法に基づき、「インタビューコース」、「アンケートコース」、「実験・計測コース」の3コース開講する。各コースは、3時間×3回とする。

＜実施計画＞

1. 平成30年4月から5月に研修プログラムを作成する。
2. 本学の「看護研究基本ステップ」（遠隔配信講座を含む）を受講した医療・福祉機関等（過去7年間）に、受講案内を送付する。
3. 平成30年8月から12月に、各コース、プログラムに沿った研修の実施を行う。

II. 活動の結果と評価

＜結果＞

1. 昨年度からの変更点として、昨年度は試行にて無料開講したが、今年度から「看護研究の基本ステップ」のステップアップ講座として受講料を設定した（受講料：1コース5,340円（税込）/人）。
2. 受講案内は49施設へ送付した。申込者数は、インタビューコース10名、アンケートコース11名、実験・計測コース3名であった。



「ハウツー看護研究」
インタビューコースの様子



「ハウツー看護研究」
実験・計測コースの様子

3. 各コースにて、教員が2名ずつ担当し、少人数での演習型の研修を実施した(表1)。

表1. ハウツー看護研究 研修プログラム

コース名	テーマ	日時	担当教員
インタビュー コース	インタビューによる質的研究を行ってみる	8/3(金) 13:00～16:10 8/31(金) 13:00～16:10 9/21(金) 13:00～16:10	浦野 茂 関根 由紀
アンケート コース	「質問紙の作成と調査の実施」 -職務満足度について考えをさぐる-	10/13(土) 9:00～16:00 10/27(土) 9:00～12:00	斎藤 真 菅原 啓太
実験・計測 コース	滅菌物取扱い時における操作しやすい 台の高さと人体計測値との関連	12/1(土) 9:00～16:00 12/8(土) 9:00～12:00	斎藤 真 長谷川 智之

4. 受講者アンケート結果

◎全体のアンケート回収数：22（回収率 92%）

1) 受講者の属性

受講者の年齢区分（図1）、経験年数（図2）を示す。年齢層は、40代50代が91%と高く、経験年数も、20年以上の看護師が半数以上であった。職務別には、スタッフ11名（50%）、管理職11名（50%）であり、教育担当者は4名（18%）であった。

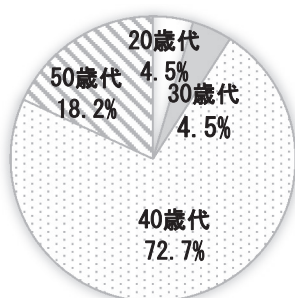


図1. 年齢

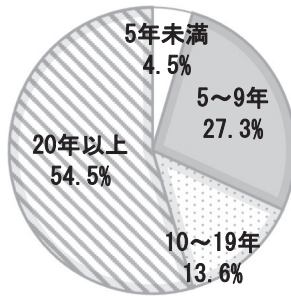


図2. 経験年数

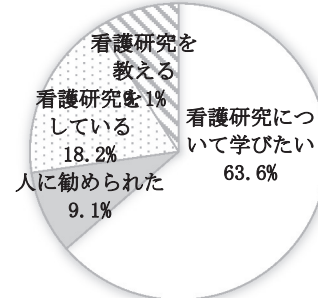


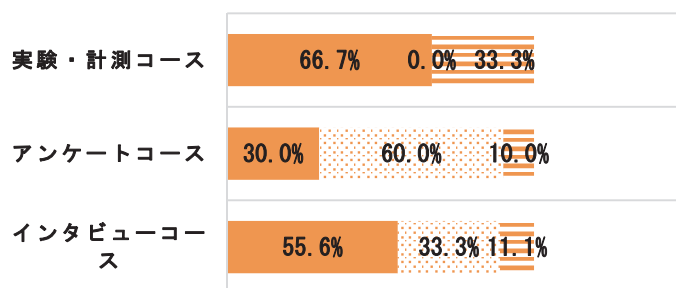
図3. 受講理由

2) 受講動機について（図3）

看護研究について学びたいと考えて受講される方が約64%と多く、実際に看護研究をしている方は18%と少なかった。一方「看護研究を教える」目的で受講した方もいた。

3) 各コースの理解度（図4）

各コースの「よく理解できた」、「まあまあ理解できた」と回答した割合は、インタビューコースが約89%、アンケートコースが90%、実験・計測コースが約67%であった。



■ 良く理解できた ▨ まあまあ理解できた ▨ どちらでもない

図4. 各講義の理解度

4) 研修の日程・時間について

研修の日程や時間については、「満足」、「やや満足」が合わせて約 82%であった。

一方、「もっと期間・時間をかけて学びたい」や、「統計、研究結果の出し方についてもう少し時間があればと思った。」という意見も聞かれた。

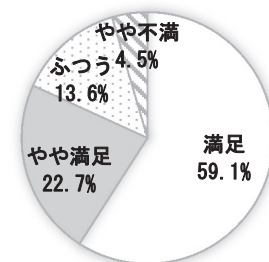


図5. 研修の日程・時間について

5) 全般における満足度

ハウツー看護研究全般における満足度を、図6に示す。「満足」、「やや満足」を合わせて、約91%と高かった。

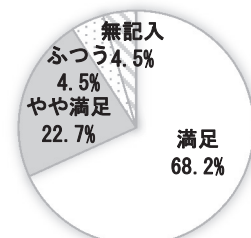


図6. 全般における満足度

6) 自由記載

「2回目の参加ですが、わからないことをすぐに聞けて、とても分かりやすく学ぶことが出来ました。」

「少人数でわかりやすい講義でした。今後もぜひ参加したいです。」

「内容がとてもわかりやすかった。対応も親切丁寧」

「他のコースも土日でしていただけると管理職が参加しやすいかなと思います。」

「講義はわかりやすく、楽しんで参加できました。」

「研究に対して苦手意識があり少しでも知りたいと思い参加した。思いがけず楽しい学びでした。」

「少人数の方が質問もしやすく、講義が理解しやすかったです。研究に取り組もうという意欲につながりました。ありがとうございます。」

など多様な意見があった。

< 評価 >

ハウツー看護研究は、昨年同様の参加人数、受講者アンケート結果（理解度、満足度）であり、大変好評であった。看護研究について学びたいと考えて受講される方が多く、また「看護研究を教える」目的で受講した方もいた。今後は、本講座をきっかけとして、看護現場での研究内容が充実し、看護の質向上につながると考えられる。

Ⅲ. 今後の課題

研究の基本的知識を学ぶ「看護研究の基本ステップ」を受講した後において、研究手法を実際に体験できるハウツー看護研究を開催することは、看護職者にとって意義のある研修であった。また、少人数による演習型の研修が、講師と参加者双方のコミュニケーションを図れ、満足度の高い研修となった。一方、「もっと時間をかけて学びたい」という意見もあったため、研修プログラムを検討し、次年度以降も3コースの研修手法を学び体験できる研修を、継続し充実させていく。

3) その他の看護研究支援

担当者：看護研究支援事業登録教員、地域交流センター

【事業要旨】

看護研究について、支援を希望する県内医療機関等からの依頼を受け、看護研究の指導を行う。支援内容は、施設を単位とする「施設単位看護研究支援」、各医療機関等で行う看護研究発表会での講評・審査を行う「看護研究発表会支援」がある。

【地域貢献のポイント】

看護職者が、臨床現場における課題について看護研究を行うことは、職業人としての意識を高め、看護の質向上につながる。本事業が、県内医療機関における看護職者の研究意欲を高めるとともに、研究遂行能力や研究的思考を養うことで、地域の人々によりよい看護を還元することができる。

I. 活動計画

＜研究支援内容＞

1. 施設単位看護研究支援

- 1) 施設単位で、看護研究を行っている看護職者のグループまたは個人に対し本学の教員が出張して指導を行う。施設からの申し込みは、1グループ6研究を目安とする。
- 2) 基本単位を、3時間×4回の指導とする。

2. 看護研究発表会支援

施設等の看護研究発表会における講評・審査を本学の教員が担当する。

＜実施計画＞

1. 施設単位看護研究支援

平成30年1月：募集案内を県内医療機関等に送付し、希望を募る。

3月：申込みのあった施設に対し、全教員から支援担当者を募集する。
双方の条件が合致したら実施にむけて調整を進める。

平成30年4月：支援の決定した医療機関へ決定通知を送付する。

平成30年5月～：担当教員が研究指導を行う。(3月末日)

2. 看護研究発表会支援

平成30年4月：全教員から支援担当者を募集する。

6月：県内各医療・行政機関等へ研究支援案内を送付。11月末日までの受付とする。

3月：支援の申込みに対し発表演題について対応可能な教員を派遣する。

Ⅱ．活動の結果と評価

＜結果＞施設単位看護研究支援と看護研究発表会支援の実績を、表 1 に示す。

1．施設単位看護研究支援

1) 今年度は、8 施設 10 件の申込みがあり、各担当教員を決定した。

2) 1 件につき最大 6 研究まで、3 時間程度×4 回実施した。

2．看護研究発表会支援

1) 看護研究発表会支援の担当には、9 名の教員からの登録があった。

2) 今年度は、2 件の申込みがあり、3 名の教員を派遣した。いずれも、施設単位看護研究支援にて指導を行った教員が、看護研究発表会支援にて講評を行っている。

＜評価＞

施設単位看護研究支援は、年々実施件数が増えており、県内医療機関における看護職者の研究意欲を高めていると評価する。また、看護研究発表会支援では、当該施設において実際に指導を担当した教員への依頼があり、研究指導に対する満足度が高いことが伺われる。

表 1．平成 30 年度 看護研究支援の実施状況

支援内容		依頼施設	担当教員名
施設単位看護研究支援	1	県立志摩病院	灘波 浩子
	2	独立行政法人 国立病院機構 鈴鹿病院	木戸 芳史
	3	県立総合医療センター	小池 敦
	4	武内病院	前田 貴彦
	5	榊原温泉病院	脇坂 浩
	6	伊勢赤十字病院①	関根 由紀
	7	伊勢赤十字病院②	北恵 都子
	8	松阪市民病院①	玉田 章
	9	松阪市民病院②	長谷川 智之
	10	藤田保健衛生大学 七栗記念病院	白石 葉子
看護研究発表会支援	1	松阪市民病院	玉田 章
	2	暁純会 （武内病院、榊原温泉病院）	前田 貴彦
			脇坂 浩

Ⅲ．今後の課題

施設単位看護研究支援の申込み件数が増加しており、各施設にて看護研究への支援要望が高くなっていると考ええる。一方、限られた指導時間の中で、具体的な研究手法を指導することは難しい課題がある。今後、「看護研究の基本ステップ」や、「ハウツー看護研究」など研修を活用しながら、看護研究支援の効率化を図っていく必要がある。

3. 公開講座

公開講座

【事業要旨】

広く県民を対象としたテーマの公開講座等を定期的に実施する。

【地域貢献のポイント】

- ・ 県民の看護・医療・健康への関心や意識を高める。
- ・ 県民の学習ニーズの把握に努め、本学が有する資源や教員各自の専門分野を活かした生涯学習等を行う。

I. 活動計画

＜数値目標＞

- ・ 参加者数の目標値 1 回 300 人以上、年間 1,000 人程度を維持する。

＜実施計画＞

1. 開催の 2 か月前に、案内パンフレットを作成、県内各所に送付し、本学ホームページにも掲載する。
2. 申込期限は開催日 5 日前まで、ただし定員（350 名）になり次第終了とする。

II. 活動の結果と評価

＜結果＞

1. 昨年度からの変更点

会場での安全確保のため、定員を 350 名とした。当日申込者は、事前申込者の着席を優先するため、講座開催 15 分前まで、入場を制限した。

2. 平成 30 年度は、3 件の公開講座を開催した。（実施の詳細は後半に記載）
3. 事前申し込み件数は 300 名程度であった。しかし、第 3 回の公開講座に関しては、募集締切の 2 週間前に定員に達したため、お断りした件数が多くなった。
4. 公開講座を知るきっかけ（図 1）は、「大学案内」が最も多く、次いで「チラシ・ポスター」「友人・知人」の順であった。

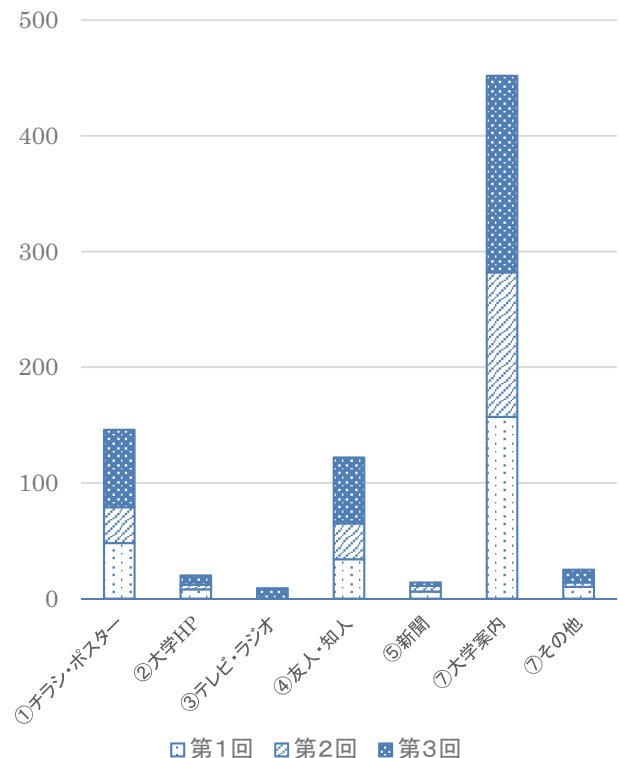


図 1. 公開講座を何で知ったか

5. 参加者数は、第1回 310 名、第2回 332 名、第3回 381 名、年間 1,023 名であった。
6. 満足度は、第1回 98%、第2回 98%、第3回 99%が満足していた（無回答除く）。
7. 今後希望する公開講座のテーマ（図2）は、「心の健康」「高齢者と健康」「認知症」「生活習慣病」の順であった。

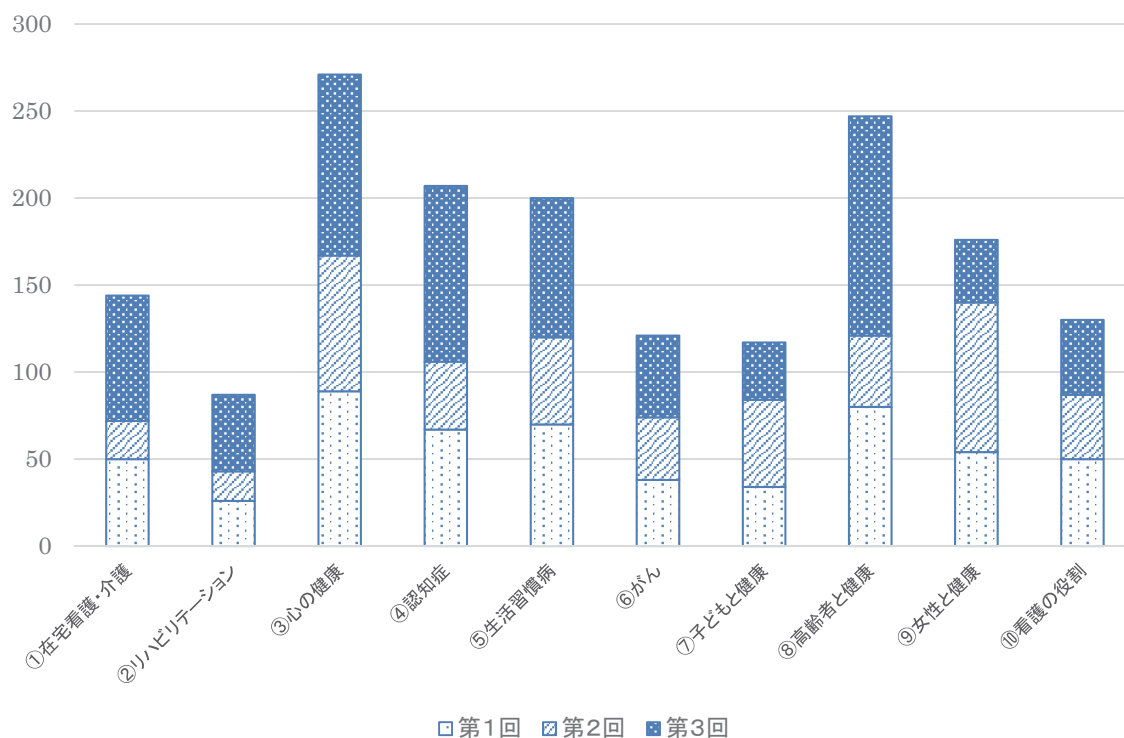


図2. 今後希望する公開講座のテーマ

< 評価 >

3回の公開講座とも参加者数の目標（300人）を達成するとともに、年間1,000人程度を維持でき、さらに参加者の満足度も高かったため、県民の看護・医療・健康への関心や意識を高めることができたと評価する。

公開講座を知るきっかけは「大学案内」が最も多く、昨年度から実施している郵送による案内の効果が大きい。一方、メールでの案内は案内不着等のリスクもあり、今年度で終了とする。また、大学ホームページの割合が低いので、ホームページの工夫が必要である。

Ⅲ. 今後の課題

応募が多数でお断りをしたケースが多かったため、県民の看護・医療・健康への関心や意識を高める機会を損なわないよう、会場を増やすなど、どのように対応していくか検討が必要である。また、県民の希望する公開講座のテーマは、「心の健康」「高齢者と健康」「認知症」「生活習慣病」が上位であったので、今後の公開講座のテーマ・講師依頼の参考としたい。

公開講座実施の詳細

1. 第1回公開講座

講演 「健幸華齢な生き方・老い方～食・運動・内服薬に関する情報の重要性～」

講師：田中 喜代次 氏（筑波大学名誉教授・教育学博士）

（日本健康支援学会理事長）

日 時：平成30年6月30日（土）

13:20～14:50

場 所：三重県立看護大学 講堂

参加人数：310名

主 催：三重県立看護大学

後 援：三重県

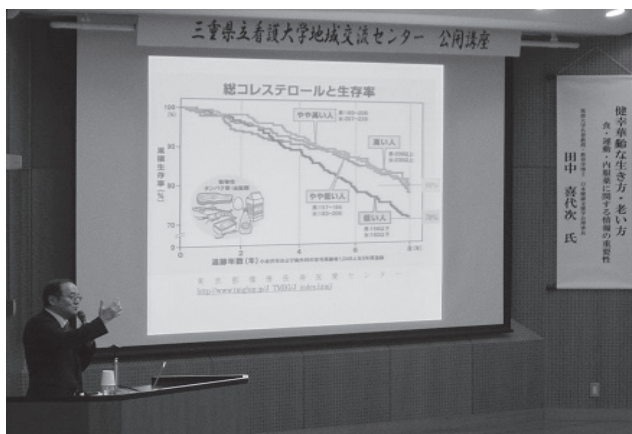
三重県看護協会

津市教育委員会

運営担当：三重県立看護大学事務局

地域交流センター

メディアコミュニケーションセンター



田中氏の講演の様子

2. 第2回公開講座：

講演 「スポーツドクターから伝えたい 女性のからだの基礎知識 PART2」

講師：高尾 美穂氏（産婦人科専門医・医学博士・婦人科スポーツドクター）

日 時：平成30年11月11日（日）

12:50～14:20

場 所：三重県立看護大学 講堂

参加人数：332名

主 催：三重県立看護大学

共 催：みえ女性スポーツ指導者の会
（公益財団法人三重体育協会）

後 援：三重県

三重県看護協会

津市教育委員会

運営担当：三重県立看護大学事務局

地域交流センター

メディアコミュニケーションセンター



高尾氏の講演の様子

3. 第3回公開講座 (NHK ハートフォーラム)

講演 「認知症になりたくない! ～認知症の予防対策を教えます～」

講師：櫻井 孝氏 (国立長寿医療研究センター・もの忘れセンター長)

日時：平成 31 年 1 月 12 日 (土)

11:00～12:30

場所：三重県立看護大学 講堂

参加人数：381 名

主催：三重県立看護大学

共催：NHK 津放送局

NHK 厚生文化事業団中部支局

後援：三重県

三重県看護協会

津市教育委員会

運営担当：三重県立看護大学事務局

地域交流センター

メディアコミュニケーションセンター



櫻井氏の講演の様子



コグニサイズ体験の様子

VI. その他

1. 情報発信・広報活動

平成 30 年度の地域交流センター事業に関する情報発信・広報活動は以下のとおりである。

1. 年報発行

地域交流センター年報 平成 30 年度 VOL. 21

発行日：平成 31 年 3 月

2. 報告会開催

平成 30 年度地域交流センター活動報告会

日時：平成 31 年 3 月 19 日（木）9 時 00 分～10 時 30 分

場所：三重県立看護大学 大講義室

3. ホームページ（地域交流センターおよび大学トピックス欄における情報発信）

- ・各種講師派遣のご案内
- ・看護研究支援のご案内
- ・公開講座開催のご案内
- ・各種研修会のご案内 など

4. パンフレットを作成し、県内関係機関へ送付

①平成 30 年度 講師派遣のご紹介（2,000 部）

- ・出前講座・その他の講師派遣

③平成 30 年度看護研究支援のご案内（200 部）

5. イベントへの参加

1) フレンテまつり 2018 でのブース展示

日 時：平成 30 年 6 月 2 日（土）10 時 00 分～15 時 30 分

場 所：三重県男女共同参画センター「フレンテみえ」

内 容：①大学広報：大学案内、講師派遣案内のパンフレット配布

②健康チェック：血管年齢・ストレスチェック、アルコールパッチテスト

体脂肪等測定、

貧血チェック、

血圧測定

骨密度測定

運営担当：三重県立看護大学事務局、

教員有志、本学学部生、

地域交流センター

主 催：フレンテまつり実行委員会、

三重県男女共同参画センター

「フレンテみえ」



フレンテまつり（健康チェック）の様子

6. テレビ・ラジオ・新聞等による広報

平成 30 年度の広報を主たる目的としたテレビ・ラジオの放送、新聞掲載を以下に示す。

表 1. テレビ・ラジオ・新聞等による広報

媒体		内容	月	日
ラ ジ オ	FMみえ	イブニングコ ースター Let's Healthy Life	「春眠暁を覚えず」を実現しよう	4 5
			連休を運動習慣にスタートに	5 10
			赤ちゃんに個性はあるのか？	6 7
			心不全って何？	7 5
			介護と表裏一体の高齢者虐待について	8 2
			「出産後の母親支援」について	9 6
			親子の関係、思春期、青年期編 (本年6月放送分(「赤ちゃんに個性はあるのか?」)の続編)	10 4
			スマホやパソコンから頸や肩そして目の疲労を防ごう	11 1
			「看護と倫理」について	12 6
			思春期の男の子とどう付き合うか？	1 3
			女性とPMS(月経前症候群)について	2 7
			認知症予防に役立つ運動(コグニサイズ)について	3 7
		CampusCube 「キャンパス インフォメー ション」	出前講座PR	4 27
			第1回公開講座PR	6 15
			第2回公開講座PR	11 2
			第2回公開講座PR	11 9
			第3回公開講座PR	12 14
		スポット CM	第1回公開講座PR	6 月
			第2回公開講座PR	11 月
			第3回公開講座PR	12 月
			認定看護師教育課程PR	1 月
			認定看護師教育課程フォローアップ研修PR	
新 聞	三重タイムズ	第1回公開講座PR	6	15
		第3回公開講座	1	25
	産経新聞	第1回公開講座PR	6	16
	三重ふるさと新聞	第1回公開講座	7	5
	伊勢新聞	みえアカデミックセミナー2018 PR	7	7
		出前講座「看護の仕事について」小学生対象	8	22
	中日新聞	第2回公開講座PR	10	30
		第3回公開講座	1	13
		認定看護師教育課程「認知症看護」修了式	2	16

2. 各種講座案内と申込書

- 1) 出前講座
- 2) その他の講師派遣
- 3) 施設単位看護研究支援
- 4) 看護研究発表会支援
- 5) 看護研究の基本ステップ
- 6) ハウツー看護研究

1) 平成30年度 「出前講座」のご案内

三重県立看護大学の教員は、自身の研究や社会的活動の成果をもとにした県民の皆さま対象の出前講座を行っております。皆さまからのお申し込みにより、集会・学習会などにお伺いして講演を行います。本冊子掲載の講座一覧からご希望のテーマをお選びください。

1 目的

出前講座は、より多くの県民の皆さまに、看護や医療、健康などに関心をもっていただくことを目的としています。

2 対象者

県内に在住・在勤・在学の5名以上の参加者が見込めるグループ・団体などが対象です。場合によっては、公開講座としての開催をお願いすることがあります。

3 ご理解いただきたいこと

- ・ 各講座の時間は1講座90分以内の開催となります。
- ・ 講師料は無料です。交通費（三重県立看護大学から会場まで）のみいただきます。
※交通事情等により現地宿泊が必要となる場合は、依頼者側が宿泊施設を予約し、その料金（素泊まり料金）を直接宿泊施設にお支払いいただきます。
- ・ 1施設からのお申し込み件数は、2件以内とさせていただきます。
- ・ 会場の手配、参加者への開催周知は利用者側でお願いします。ただし、大学を会場としてお貸しすることもできます（有料）。
- ・ 政治、宗教、営利を目的として実施する場合、もしくは、政治・宗教・営利を目的とした催しと一体的に実施する場合はお断りします。
- ・ 開催日や時間についてはご相談に応じますが、教員の業務の都合上ご希望に添えない場合があります。
- ・ 土・日・祝日や夜間（終了時間が20時以降になる場合）の開催については対応できませんので、ご了解をお願いします。
- ・ 各講座には、回数に限りがあります。やむをえずお断りすることがございますので、ご了承下さい。

4 お申し込み期間

平成30年度のお申込みは、平成30年11月30日（金）まで受付けます。開催希望日の60日前までにお申込みください。

※講座には回数に限りがあります。やむをえずお断りすることがございます。

5 テーマ選定～お申込みの流れについて

前ページに記載してある「3 ご理解いただきたいこと」をよくお読みください



本冊子「平成30年度 三重県立看護大学 地域交流センター 講師派遣のご紹介」に記載されている『出前講座』から、ご希望のテーマをお選びください。



○ページの「出前講座」申込書にご希望テーマ、必要事項等を記載して下さい。



必要事項を記入した申込書を、FAX または E-mail にて、三重県立看護大学 地域交流センター迄、お申し込み下さい。

(TEL/FAX : 059-233-5610、E-mail : rc@mcn.ac.jp)

6 お申込みから実施までの流れ

申込書に記載して頂いた希望内容に応じて、地域交流センターから担当講師と日程を調整致します。



日程調整後、お申込者に地域交流センターより決定通知書（日時と交通費支払等手続きに関する書面）をお送りします。

（日時の調整がつかずやむをえずお断りすることがあります。ご了承ください）



申込書に記載して頂いた希望内容に応じて、地域交流センターから担当講師と日程を調整致します。



決定通知書をお受取り後、講座内容の詳細については、お申込者より担当講師と直接打ち合わせをしていただきます。



決定通知書をお受取り後、講座内容の詳細については、お申込者より担当講師と直接打ち合わせをしていただきます。

※申し込みの前にお問い合わせいただくことも可能です。

※三重県立看護大学ホームページ「三重県立看護大学＞地域交流センター＞出前講座」では、出前講座一覧が確認でき、申込み多数にて受付を中止した講座に関する情報や、申し込み用紙がダウンロードできます。

※尚、申し込みご依頼後 1 か月を過ぎても、地域交流センターからの返事がない場合は、お手数をおかけしますが、お電話にてご確認くださいようお願いいたします。

7 お問い合わせ先

公立大学法人三重県立看護大学 地域交流センター

〒514-0116 三重県津市夢が丘 1 丁目 1 番地 1

TEL/ FAX (059) 233-5610

E-mail : rc@mcn.ac.jp

ホームページ//三重県立看護大学＞地域交流センター＞出前講座



1) 平成30年度 「出前講座」 申込書

申込書記入日 平成 年 月 日

機関・団体名称				
連絡先	担当者名			
	住所	〒	電話	
	FAX		E-mail	

*申込書にご記入いただいた個人情報につきましては、出前講座決定通知書の送付や出前講座実施に向けての打ち合わせに使用させていただきますものであり、その他の用途に使用することはありません。

出前講座の希望内容	希望日時 第1～3	① 平成 年 月 日 () 時 分 ～ 時 分 ② 平成 年 月 日 () 時 分 ～ 時 分 ③ 平成 年 月 日 () 時 分 ～ 時 分			
	希望会場名			参加予定人数	名
	会場所在地			参加者の内訳 (例：看護師30名、 保護者30名、高校 2年生30名など)	
	番号/ テーマ名	No. —	テーマ名		
出前講座資料		<input type="checkbox"/> 事前に必要 <input type="checkbox"/> 当日でよい *資料の有無は講座によります。 必要部数の印刷は依頼者側で行っていただきます。		*その他ご希望がありましたらご記入ください。	

.....
以下は地域交流センター使用欄

三重県立看護大学地域交流センター「出前講座」決定通知書

ご依頼いただきました出前講座は、下記の通り決定しましたのでお知らせします。

平成 年 月 日

決定事項	テーマ番号	No.	テーマ名		
	開催日時	平成 年 月 日 () 時 分 ～ 時 分			
	講師氏名			講師連絡先	

上記の講師にご連絡のうえ、詳細な打ち合わせを行ってください。ご不明な点がございましたら下記の連絡先までお問い合わせください。

【連絡先】 三重県立看護大学地域交流センター

〒514-0116 津市夢が丘1丁目1番地1

TEL/FAX (059) 233-5610

E-mail : rc@mcn.ac.jp

2) 平成30年度「その他の講師派遣」のご案内

三重県立看護大学地域交流センターでは、看護研究に関する講座や出前講座等を実施しております。しかし、いずれの講座にも含まれない内容をご希望される場合は、「出前講座にはない〇〇に関する講演をしてほしい」などご要望に合わせて、講師派遣をさせていただきます。

講師派遣のご要望の際には、〇ページ「講師派遣」の申込書にご記入の上、下記のお問い合わせ先「三重県立看護大学 地域交流センター」までFAX またはメールにてお送りください。

本学にてすでに準備がある講座以外は、有料となりますのであらかじめご了承ください（料金はお問い合わせください）。

【問い合わせ先】

〒514-0116 三重県津市夢が丘 1 丁目 1 番地 1

公立大学法人三重県立看護大学 地域交流センター

TEL/ FAX (059) 233-5610

E-mail : rc@mcn.ac.jp

2) 平成30年度「その他の講師派遣」申込書

※該当する講座がない依頼の場合にご使用ください。有料でお受けします。

申込書記入日 平成 年 月 日

機関・団体名称					
連絡先	担当者名				
	住所	〒		電話	
	FAX		E-mail		

具体的内容 *別紙添付可					
参加者予定者 (看護師、高校生等)				予定人数	名
希望時期(日時) 第1～第3希望	① 平成	年	月	日()	時 分 ～ 時 分
	② 平成	年	月	日()	時 分 ～ 時 分
	③ 平成	年	月	日()	時 分 ～ 時 分
希望の教員名等、 その他希望内容					

.....
 以下は地域交流センター使用欄

決定通知書

ご依頼いただきました事業の担当教員は、下記の通り決定しましたのでお知らせします。

平成 年 月 日

決定事項	内容				
	開催日時	平成	年	月	日() 時 分 ～ 時 分
	教員氏名		教員 連絡先		

上記の教員にご連絡のうえ、詳細な打ち合わせを行ってください。ご不明な点がございましたら下記の連絡先までご連絡ください。

【連絡先】 三重県立看護大学地域交流センター
 電話/FAX (059)233-5610

E-mail : rc@mcn.ac.jp

3) 平成 30 年度 「施設単位看護研究支援」のご案内

■ 施設単位看護研究支援事業とは

看護研究に取り組んでおられる施設単位を対象とした支援で、看護研究を行う看護職の複数のグループ（または個人）に対し、本学の教員が看護研究のプロセスに沿った指導を行います。

■ 研究指導期間

契約の成立～平成 31 年 3 月 31 日

■ 指導の方法

1 回につき 180 分指導（1 研究 30 分×6 件）×年 4 回を目安とします。契約期間は 1 年間になりますので、計画的に進められることをお勧めします。

担当教員が施設に出向いて指導しますので、指導のできる場所をご用意ください。指導日は依頼者側と担当教員とが直接相談して決めていただきます。担当教員が複数名になることがあります、その場合は担当する研究テーマによって指導日が異なることがあります。

■ 指導料金について

- ・講師料と講師の交通費（三重県立看護大学から依頼者施設まで）は研究支援がすべて終了してから、請求させていただきます。指導料金については下記までお問い合わせください。料金は本学の口座振り込みとなります。
- ・年間 4 回指導を基準とし、追加の場合は追加料金をいただきます。なお担当教員の都合によっては追加に対応できない場合があります。
- ・研究発表会にかかる審査・講評は含みません。（研究発表会支援は別途案内させていただきます）。
- ・やむをえない交通事情等により講師の現地宿泊が必要となる場合は、依頼者側が宿泊施設を予約し、その料金（素泊まり料金）を直接宿泊施設にお支払いいただきます。

■ ご了解いただきたいこと

- ・指導する教員は、ある特定の領域に所属しておりますので、すべての領域の研究に通じているわけではありません。専門領域でない場合には具体的な看護の内容までは対応しかねる場合があります。

■ お申し込み方法

所定の申込用紙により三重県立看護大学地域交流センターまで、FAX、E-mail、郵送のいずれかでお申し込みください。申込書は三重県立看護大学ホームページ(<http://www.mcn.ac.jp/>)からもダウンロードできます。

申し込み締め切りは、平成 30 年 2 月 28 日（水）とさせていただきます。

■ お申し込みから施設単位看護研究支援終了までの流れ

- ① 申込書に記載のうえ、三重県立看護大学地域交流センターまでお申し込みください。
- ② 地域交流センターより指導教員決定通知書をお送りします。（4 月初旬）
- ③ 指導教員との間で指導日程の調整後、研究指導開始となります。
- ④ 最終指導終了後、本学より講師料と交通費を請求いたします。

■ 問い合わせ先・申し込み先

〒514-0116 三重県津市夢が丘 1 丁目 1 番地の 1

公立大学法人三重県立看護大学 地域交流センター

TEL/FAX 059-233-5610 E-mail : rc@mcn.ac.jp

3) 平成 30 年度 「施設単位看護研究支援」 申込書

申込〆切 : 平成 30 年 2 月 28 日 (水)

施設名						
担当者連絡先	住所	〒				
	担当者					
	電話		FAX		E-mail	

*申込書にご記入いただいた個人情報につきましては、施設単位看護研究支援決定通知書の送付や指導実施に向けての打ち合わせに使用させていただくものであり、その他の用途に使用することはありません。

指導を希望する 研究テーマ数	件 (MAX 6 件まで)
研究内容 (決まっていれば各テーマ名をお書きください。 別途、資料添付可)	
*指導希望教員名 (あればご記入ください)	

*指導希望教員については、ご希望に添えない場合がありますので、ご了承ください。

 以下は地域交流センター使用欄

三重県立看護大学地域交流センター「施設単位看護研究支援」決定通知書

ご依頼いただきました施設単位看護研究支援の指導教員は、下記の通り決定しましたのでお知らせします。

平成 年 月 日

決定事項	施設名		
	指導教員名		
	指導教員連絡先	TEL :	E-mail :

上記の指導教員にご連絡のうえ、日程、内容、方法等、詳細な打ち合わせを行ってください。
 ご不明な点がございましたら下記の連絡先までご連絡ください。

【連絡先】 三重県立看護大学地域交流センター

TEL/ FAX (059) 233-5610 E-mail : rc@mcn.ac.jp

4) 平成 30 年度「看護研究発表会支援」のご案内

■ 看護研究発表会支援とは

施設等の看護研究発表会における講評・審査を担当します。県内の医療機関、行政等に勤務される皆さまからのお申込みに対し、本学教員がお伺いし支援します。

■ 目的

三重県内の看護職員の研究的思考の育成、向上を図ることを目的とします。

■ 支援対象

三重県内にある医療機関、行政等で、5 題以上の研究発表がある看護研究発表会

■ 指導料金

- ・講師料および交通費（三重県立看護大学から発表会会場まで）をご負担いただきます。詳しくは下記までお問い合わせください。
- ・現地宿泊が必要となる場合は依頼者側で宿泊施設を予約ください。なお宿泊料金（素泊まり料金）は、直接宿泊施設にお支払いください。

■ ご理解いただきたいこと

- ・会場の手配、参加者への開催の周知は依頼者側でお願いします。
なお、本学を会場としてお貸しすることもできます（有料）。
- ・当日の講師の役割は看護研究発表会の発表に関する講評・審査のみとさせていただきます。

■ 申し込み方法

- ・裏面の申込用紙により三重県立看護大学地域交流センターまで、FAX、E-mail、郵送のいずれかでお申し込みください。
- ・申込み締め切りは平成 30 年 11 月 30 日（金）です。開催希望日の 60 日前までにお申し込みください。

■ 申し込みから実施までの流れ

- ① 申込書に記載のうえ、三重県立看護大学地域交流センターまでお申し込みください。
- ② 担当教員を決定し、地域交流センターから決定通知書をお送りします。
- ③ 詳細については、担当教員と直接打ち合わせを行ってください。
- ④ 研究抄録を、開催 1 週間前までに担当教員にお送りください。
- ⑤ 発表会終了後に、本学より講師料と交通費を請求いたします。料金は本学指定の口座への振込となります（誠に恐れ入りますが振込手数料はご負担願います）。

■ 問い合わせ先・申し込み先

〒514-0116 三重県津市夢が丘 1 丁目 1 番地の 1

公立大学法人三重県立看護大学 地域交流センター

TEL/FAX : 059-233-5610

E-mail : rc@mcn.ac.jp

4) 平成30年度 「看護研究発表会支援」申込書

申込書記入日 平成 年 月 日

所属機関の名称							
連絡先	所在地	〒					
	担当者氏名						
	電話		FAX		E-mail		

*申込書にご記入いただいた個人情報につきましては、看護研究発表会支援決定通知書の送付や看護研究発表会実施に向けての打ち合わせに使用させていただくものであり、その他の用途に使用することはありません。

開催希望日時 (第1、第2)	① 平成 年 月 日 () 時 分 ~ 時 分 ② 平成 年 月 日 () 時 分 ~ 時 分					
発表会の名称						
開催会場名					参加予定人数	人
会場所在地					会場電話番号	
予定発表演題数	□演 () 題、示説 () 題				*その他希望がありましたらご記入下さい。	
ご希望される 教員名						
発表演題の分野 (各領域や質や量的 研究など)						

.....
以下は地域交流センター使用欄

三重県立看護大学地域交流センター「看護研究発表会支援」決定通知書

ご依頼いただきました看護研究発表会の担当教員について、下記の通り決定しましたのでお知らせします。

平成 年 月 日

決定事項	発表会の名称					
	開催日時	平成 年 月 日 () 時 分 ~ 時 分				
	講師氏名		講師連絡先			

上記の講師にご連絡のうえ、詳細な打ち合わせを行ってください。

5) 平成30年度 看護研究の基本ステップのご案内

■ 目的

「看護研究の基本ステップ」は、看護研究初学者のための講座で、研究に取り組むための基本的知識・技術の習得を目指します。

■ 研修プログラム

裏面を参照してください。

■ 募集人数

40 名程度

■ 応募資格

- 1) 看護の現場で看護実践を行っている方
- 2) これから看護研究に取り組もうとしている方（もしくは現在取り組んでいる方）
- 3) 全コース参加可能な方

■ 応募方法

別紙申込書にて下記まで **FAX**、または、別紙申込書に書かれている項目を記載頂き **E-mail** にて**お申し込み**ください。

■ 募集締め切り

平成 30 年 5 月 31 日（木）

※定員に達した時点で締め切らせていただきます。

■ 受講者決定

原則として申込の先着順にて、受講を決定します。

受講決定者には、受講決定通知を送付します。応募締め切り日を 1 週間過ぎても連絡がない場合は、お問い合わせください。

■ 受講料（資料代含む）

7,776 円（消費税込）/8 科目 13 時間

※受講料の支払い方法については、受講決定通知の際にお知らせします。

■ 申し込み・問い合わせ先

三重県立看護大学地域交流センター

〒514-0116 津市夢が丘 1 丁目 1 番地の 1

TEL/FAX : 059-233-5610

E-mail : rc@mcn.ac.jp

平成30年度看護研究の基本ステップ プログラム

■ 研修プログラム

◎ 会場：三重県立看護大学

開催日	時 間	教 室	テーマ	講 師
6月22日 (金)	12:50～13:00	中講義室3 (2階)	あいさつ（地域交流センター長）	
	13:00～14:30		看護研究の意義と文献の活用	大越扶貴
	14:40～16:10	第1情報処理 教室（1階）	文献検索と図書館の利用	別當直子 (図書館司書)
6月29日 (金)	13:00～14:30	中講義室3 (2階)	研究計画書の立て方と書き方	竹本三重子
	14:40～16:10		質的研究	関根 由紀
7月19日 (木)	13:00～14:30	中講義室1 (1階)	量的研究	長谷川智之
	14:40～16:40	第2情報処理 教室（1階）	統計解析（演習含む）	斎藤 真
8月2日 (木)	13:00～14:30	多目的講義室 (2階)	研究論文作成	玉田 章
	14:40～16:40	第2情報処理 教室（1階）	プレゼンテーション（演習含む）	大西 範和
	16:40～17:10		修了証書授与式（地域交流センター長） 相談コーナー（自由参加）	

5) 平成30年度『看護研究の基本ステップ』申込書

三重県立看護大学地域交流センター 宛

FAX 059-233-5610 E-mail rc@mcn.ac.jp

※申し込み締め切り 平成30年5月31日(木)

受講希望者のお名前	(ふりがな)
ご所属 (施設名・病棟名等)	
決定通知書の 送付先住所	〒
決定通知書の宛名 (いずれかに○を付けてください)	<input type="checkbox"/> ご本人 <input type="checkbox"/> ご本人以外 〔役職名： お名前： 〕 *1
緊急連絡先 *2 (いずれかに○を付けてください)	<input type="checkbox"/> ご本人、 所属先、 その他：) TEL： 携帯：
連絡先 FAX	FAX： E-mail(PC)

*1 ご本人以外の場合は、宛名の方の役職名とお名前をご記入ください。

*2 急な連絡の際に、確実にご本人に連絡がつくお電話番号をお書きください。

初学者向き

6) ハウツー看護研究



＜目的＞

調査や実験によるデータ収集、考察に至る一連の過程を通して、研究を進めるための基礎的な方法を身に付けることを支援します。

＜対象＞

- 本学地域交流センターの「看護研究の基本ステップ」もしくは同等の研修を修了している方。
- 原則として、申し込んだ各コースの全日程に参加できる方。
※ご希望の各コースを受講できます

＜費用＞

1 コース 5,340円（税込）

＜内容＞

コース	アンケートコース	インタビューコース	実験・計測コース
日時	10/13（土）9：00～16：00 10/27（土）9：00～12：00	8/3（金）13：00～16：10 8/31（金）13：00～16：10 9/21（金）13：00～16：10	12/1（土）9：00～16：00 12/8（土）9：00～12：00
担当者	斎藤 真 菅原啓太	浦野 茂 関根由紀	斎藤 真 長谷川智之
テーマ	「質問紙の作成と調査の実施」－職務満足度について考えをさぐる－	「インタビューによる質的研究を行ってみる」	「医療現場における作業台の高さに関する実験的検討」－ミキシング作業と人体計測値の関係をさぐる－
第1回	1. はじめに 2. 調査を行う前に（倫理的配慮を含めた調査研究の注意事項） 3. 調査用紙に用いる尺度 4. 調査用紙の作成：フェースシート、単一回答/選択、複数回答/選択、順位法、数値配分法、SD法、自由記述 5. 調査開始 6. データの入力・集計	1. 質的研究法の特徴と使い方：質的研究法の意義と限界 2. 研究課題を作る：質的研究法に適した課題 3. 研究デザインを考える：適切な人へのアプローチ法 4. インタビューガイドを作る：適切な話題の作り方 5. インタビューを行ってみる：語りを導く関わり方 6. 逐語録を作る：文字起こしを自力で行う	1. はじめに 2. 実験を行う前に：倫理的配慮を含めた実験の注意事項 3. 実験装置の準備 4. 実験開始：実験協力者への説明と同意、調整法による台の高さの計測、人体計測値の測定 5. データの集計
第2回	1. 集計結果の整理、図式化 2. 統計的解析 3. データの検討 4. 結果の整理と考察への展開	1. 分析を行う：語りに備わる意味的な秩序への手がかりを探し出す	1. 集計結果の整理、図式化 2. 統計的解析 3. データの検討 4. 結果の整理と考察への展開
第3回	1. 論文の作成：目的、方法、結果、考察の記述	1. 分析結果をまとめる：語りにそなわる意味的な秩序を定式化する 2. 分析結果を報告する：「発見」の作り方	1. 論文の作成：目的、方法、結果、考察の記述

<会場・アクセス>

三重県立看護大学
(三重県津市夢が丘1-1-1)

【津駅西口から】

バス：三重交通バス1番のりば（津駅西口）
→「夢が丘団地」行き「看護大学前」

バス停下車 徒歩1分

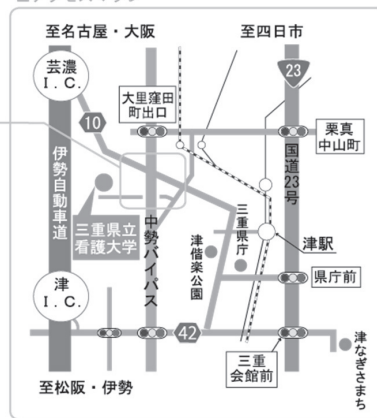
タクシー：津駅西口より約15分



■拡大図



■アクセスマップ



<申込方法>

下記申込書に必要事項をご記入のうえ、申込先へメールまたはFAXでお申し込みください。

申込期間 平成30年6月1日（金）～7月13日（金）

【申込先】※送付状不要

FAX : 059-233-5610 E-mail : event.rc@mcn.ac.jp

ハウツー看護研究 受講申込書					
フリガナ			所属施設	職業	(例) 看護師
お名前					
連絡先 (送付先)	住所	〒		ご希望の コース ○をつけて ください。	アンケート
	電話番号				インタビュー
	メール				実験・計測
過去もしくは今年度に本学の「看護研究の基本ステップ」を受講したことがありますか？ H30年度看護研究の基本ステップ(申し込み締切 5/31)を受講頂いた方は、ハウツー看護研究をお申込みできます。 ※「ない」方は下記にお答えください。				ある ・ ない 今年度受講予定 ※どれかに○をつけてください。	
「ない」方にお聞きます。 今まで研究方法についてどのような研修を受けたことがありますか？具体的にご記入ください。					

<お問い合わせ先>

公立大学法人三重県立看護大学 地域交流センター

TEL : 059-233-5610 (平日9時～16時) E-mail : rc@mcn.ac.jp

編集後記

平成 30 年度三重県立看護大学地域交流センター年報が完成しました。

ご協力いただきました皆様に感謝いたします。

今年度も、本学全教員が地域の皆さまとともに、多くの事業に取り組んでまいりました。当センターの講師派遣事業は、県民の皆様に周知され、派遣申し込みも年々増えており、教育・研究の成果を地域に還元することができたと感じております。「教員提案事業」では、各教員から提案された様々な事業を関係機関と協働し、地域の皆様との交流をとおして進めることができました。また、認定看護師教育課程「認知症看護」も 2 年目を迎え、毎年 30 名の研修生が修了し県内で活躍しております。看護職を対象とした「看護研究支援事業」、「受託事業」など、教育支援事業も充実してきております。これらの事業を進めるにあたり関係者の皆様、地域の皆様に多大なご理解ご協力いただきましたことを、感謝申し上げます。

今年度も、それぞれの事業内容を、「教員提案事業」「卒業生支援事業」「受託事業」「認定看護師教育課程」「地域交流センター企画事業」の 5 項目にまとめ、資料と共に収録いたしました。

本年報を通じて、多くの皆様に当地域交流センターの活動と地域貢献についてご理解いただければ幸いです。

三重県立看護大学
地域交流センター
平成 30 年度
Vol. 21

編集・発行	三重県立看護大学地域交流センター
住 所	〒514-0116 三重県津市夢が丘 1 丁目 1 番地 1
発行年月	平成 31 年 3 月
